

京都府埋蔵文化財情報

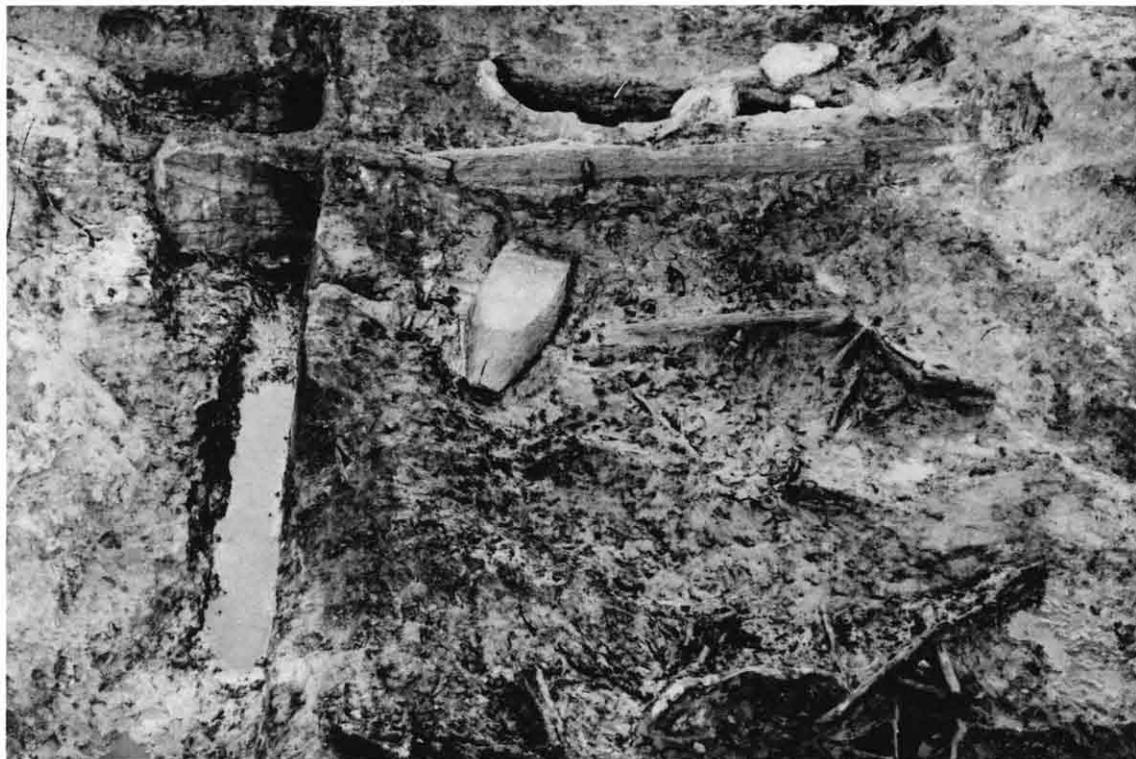
第 11 号

| | |
|--------------------------------------|-----------------|
| 北金岐遺跡B地点検出の大溝について……………石井 清司・森下 衛………… | 1 |
| 七尾南古墳群について……………田中 光浩………… | 11 |
| —昭和58年度発掘調査略報—…………… | 16 |
| 13. 千代川・桑寺遺跡 | 17. 長岡京跡右京第156次 |
| 14. 篠窯跡群(田畑試掘調査) | 18. 長岡京跡(立会調査) |
| 15. 長岡京跡右京第148次 | 19. 精華町祝園地区遺跡 |
| 16. 長岡京跡右京第153次 | |
| 資料紹介 南金岐遺跡出土の石庖丁…………… | 28 |
| 府下遺跡紹介 18. 高麗寺跡 19. 山城国分寺跡…………… | 30 |
| 長岡京跡調査だより…………… | 34 |
| センターの動向…………… | 38 |
| 受贈図書一覧…………… | 39 |

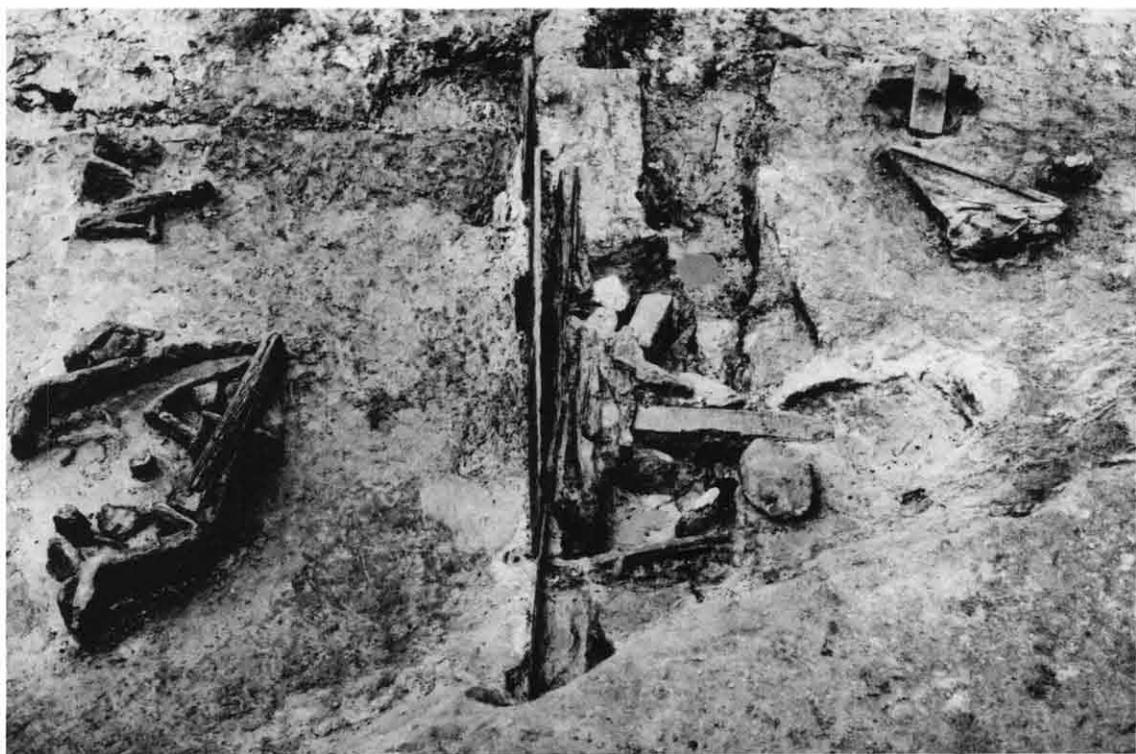
1984年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版1 北金岐遺跡



(1) SD01出土堰及び舟型木製品（西から）



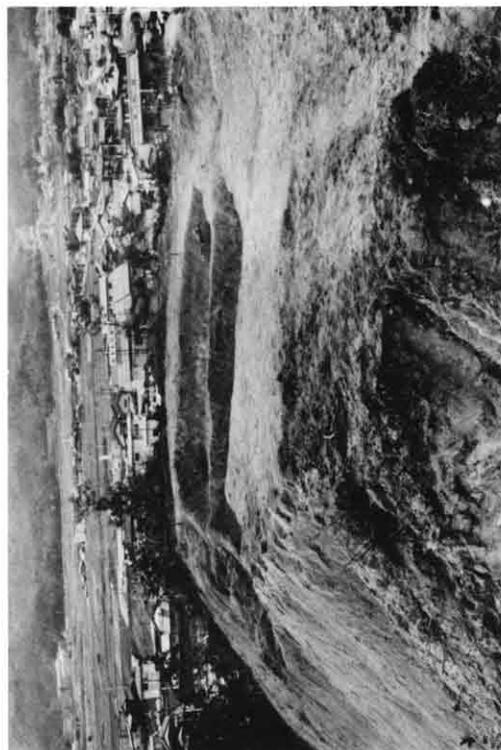
(2) SD01出土堰及び梯子型木製品（南から）



(2) 1号墳第1主体部 壺棺



(4) 土塚墓

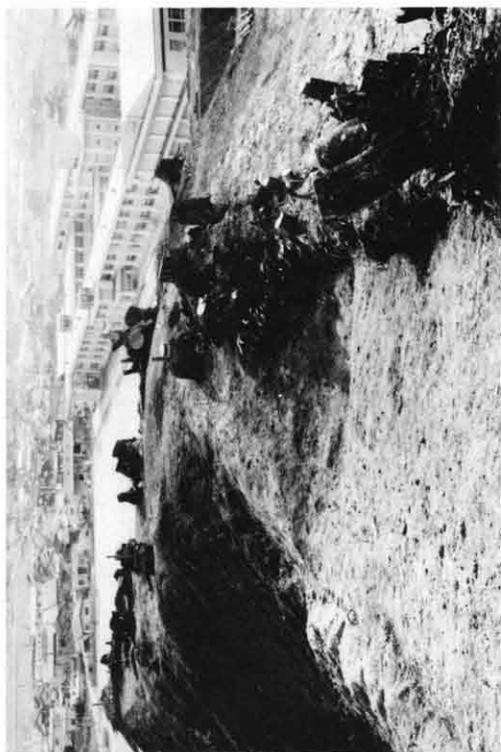


(1) 1号墳遠景 (西から)



(3) 1号墳第2主体部 (南から)

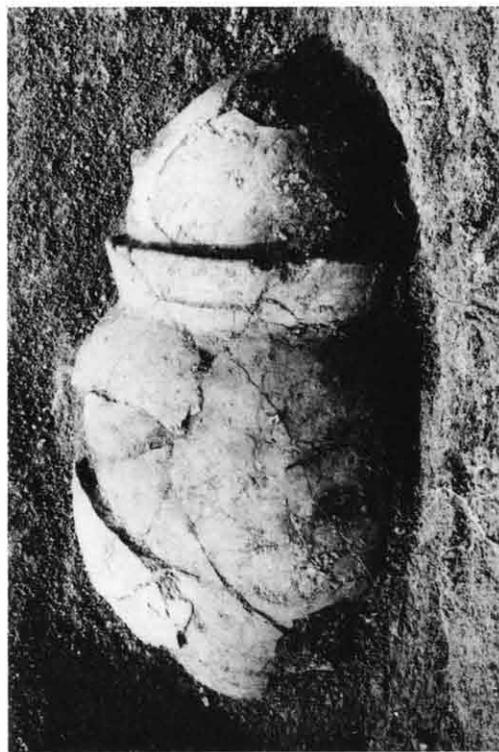
図版3 七尾南古墳群



(1) 2号墳遠景(西から)



(2) 3号墳第1主体部(西から)



(3) 3号墳第1主体部 壺棺



(4) 3号墳第2主体部

北金岐遺跡B地点検出の大溝について<図版1>

石井清司・森下衛

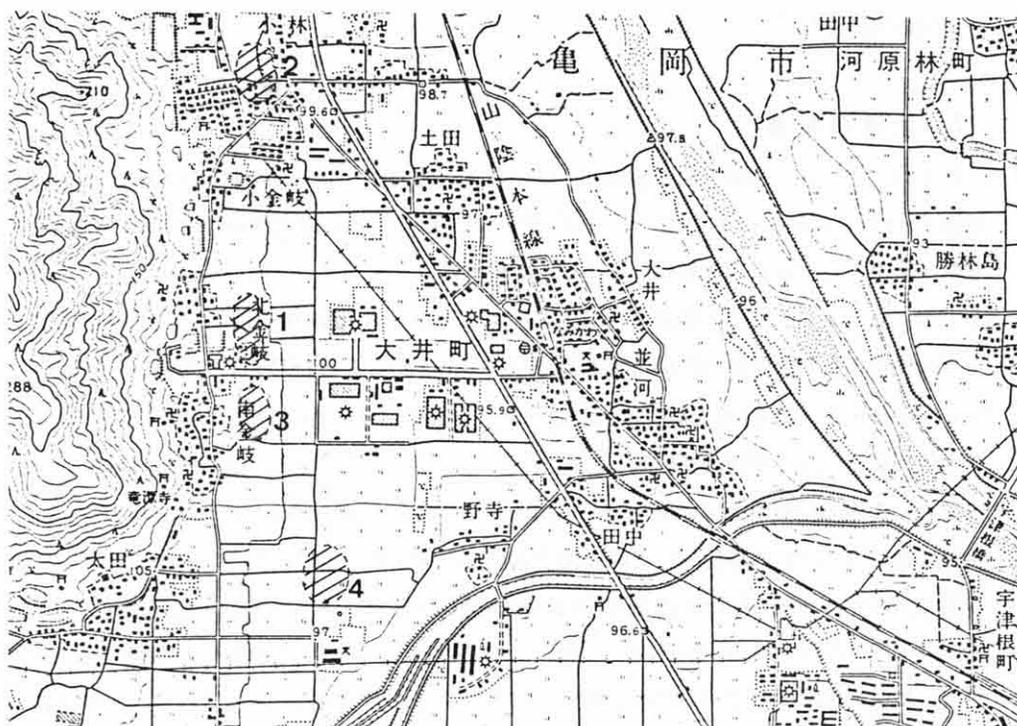
1. はじめに

北金岐遺跡は亀岡市大井町北金岐に所在し、標高431mを測る行者山からゆるやかにのびる丘陵先端に位置する。

北金岐遺跡周辺の平野部には碁盤目状の方格地割の畦畔が整然と残り、口丹波における条里制遺構として古くから知られていた。

北金岐遺跡を含めた条里制遺構の調査は、昭和55年度千代川地区の発掘調査に始まり、次年度以降、千代川第2次・太田・南金岐・北金岐の各遺跡の調査が継続して行われている。

これまでの発掘調査では、明確な条里制遺構は検出しえなかったが、条里制施行以前の遺構が検出された。特に行者山を中心とした丘陵縁辺部に弥生時代前期～中期初頭の環濠



第1図 北金岐遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 北金岐遺跡 2. 千代川遺跡 (第3次) 3. 南金岐遺跡 4. 太田遺跡

集落（太田遺跡^(注1)）、弥生時代中期初頭の方形周溝墓（南金岐遺跡^(注2)）、弥生時代後期以降の堅穴式住居跡群（千代川遺跡^(注2)）があり、注目されている。

北金岐遺跡の発掘調査は、条里制遺構の確認、その下層遺構の有無を確認するため、東西約70m・南北約480mの対象地に、各田畑を単位に3m×6mの試掘坑を数か所設定し、試掘調査を行った。

試掘調査の結果、北金岐遺跡は弥生時代後期より室町時代に至る複合遺跡であり、遺構・遺物の検討より、第Ⅰ期；弥生時代後期～古墳時代初頭、第Ⅱ期；古墳時代後期、第Ⅲ期；奈良時代中期～平安時代初頭、第Ⅳ期；鎌倉時代～室町時代の4期に分れる。その内、条里制に伴う明確な遺構は検出しえなかったが、第Ⅲ～第Ⅳ期には、現在の田畑の畦畔と方位を同じくする掘立柱建物跡及びその区画溝が確認された。また、第Ⅱ期には古墳時代後期において京都府下で出土例が少ない製塩土器が出土し、注目されている。第Ⅰ期には3基の堅穴式住居とその中央を流れる大溝があり、溝と住居の有機的關係が認められ、出土遺物もコンテナ・バット150箱以上の土器が出土し、今後整理作業が進むにつれ亀岡盆地における標式資料になると考えられる。

なお、今回は第Ⅰ期の遺構である大溝（SD 01）より検出された堰の施設及び木製品について資料紹介を行う。

2. 大溝の概要

北金岐遺跡における第Ⅰ期の遺構は3基の堅穴式住居跡（SB 02・SB 03・SB 15）、溝状遺構（SD 01・SD 21・SD 26）、土坑（SK 09・SK 10）があり、調査地の中央（B地点）に遺構が集中する。堅穴式住居は一辺約6～7mの隅丸方形を呈し、遺存状態の良好なSB 03では、周壁溝が囲繞し、床面では炭化木とともに多数の土器が出土した。溝状遺構は検出長約55m・上面幅約8～10m・深さ約1.5～2.0mを測る大溝（SD 01）のほか、上面幅約0.4～0.5m・深さ約0.3mを測り、大溝に注ぎ込む小溝（SD 21・SD 26）がある。

大溝は東西方向に調査地を縦断し、埋土は4～5層に大別できる。埋土内には弥生時代後期より古墳時代初頭までの遺物を多量に含み、大溝の堆積状況を土器形式でみると、弥生時代後期後半～庄内併行期に自然流路を利用し、溝の掘削が行われる。そののち、時間を得て河床面に約30～80cmの流土が堆積した布留式併行期に一部埋土の除去・改修を行うと同時に堰の施設を構築する。堰の上層には厚さ約20～40cmの黒色粘土層が堆積し、同層直上には庄内併行期の土器が多量に廃棄される。これは土器型式の逆転であるが、黒色粘土層直上の庄内併行期の土器が大溝の西端に集中し、その多くが細片及び一部ローリングを受けていることより2次堆積と考えられる。

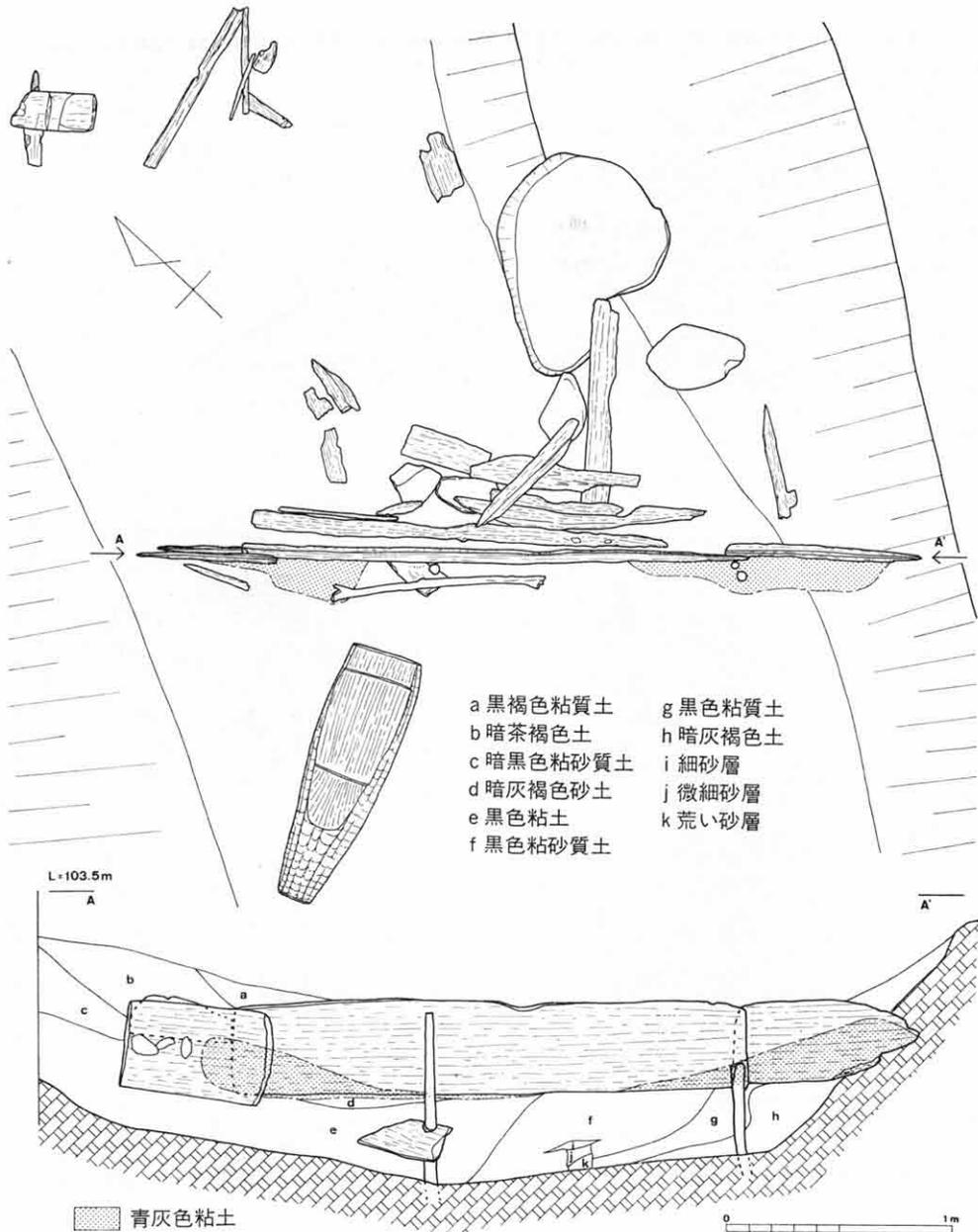


第2図 北金岐遺跡B地点遺構配置図

3. 堰の施設

堰は大溝の西端より東約11mで検出され、庄内期に掘削された大溝の溝幅を縮小し、河床面より約20~30cmの堆積土層上面より、溝に直交するかたちで構築されている。

堰は3枚の板材を重ねあわせて堰板とし、堰板の全長約3.5m、堰構築の際の掘形は約



第3図 大溝内の塚及び木製品

3.9mを測る。中央の塚板は長さ約220cm・幅約39cm・厚さ約3cmを測り、中央上面には長さ約20cm・深さ約5cmで「U」字形に切り下げる。北塚板は長方形の板材で長さ約65cm・幅約35cm・厚さ約3cmを測る。北塚板の裏面には長さ約35cm・幅約15cmの横板を重ねる。南塚板は掘形の形態に左右され、上面長約90cm・下面長約60cm・幅約35cm・厚さ約3cmを測り、長辺を上にした台形を呈する。各塚板は上面が腐蝕し不明瞭であるが、下半は鉄製

手斧によりていねいに整形されている。

3枚の堰板を固定する施設として堰板の前面には立杭を、裏面には板材及び丸木材とともに栗石を据える。前面の立杭は3本検出され、南側で検出された2本は中央の堰板と南の堰板の接合部に打ち込まれる。他の1本は中央堰板の中央よりやや北側に偏して打ち込まれる。各立杭は60～90cmの長さで検出され、杭下半は地山面に達する。堰板の裏面には直径7～8cm、長さ約185cmの丸木のほか、大小6枚の板材及び人頭大の栗石を4個据える。また、堰板の固定には前述の杭・板材・栗石のほか厚さ約10cmに達する青灰色粘土を各堰板の接合部の中心に貼り付け、堰板の補強を行う。

4. 出土遺物

大溝内出土遺物には土器・石器・木器があり、その内土器はコンテナ・バット150箱以上に達し、石器・木器は少量である。各遺物は現在整理中であり、今後報告書において詳細に検討し、今回は特に注目される木製品について資料紹介を行う。

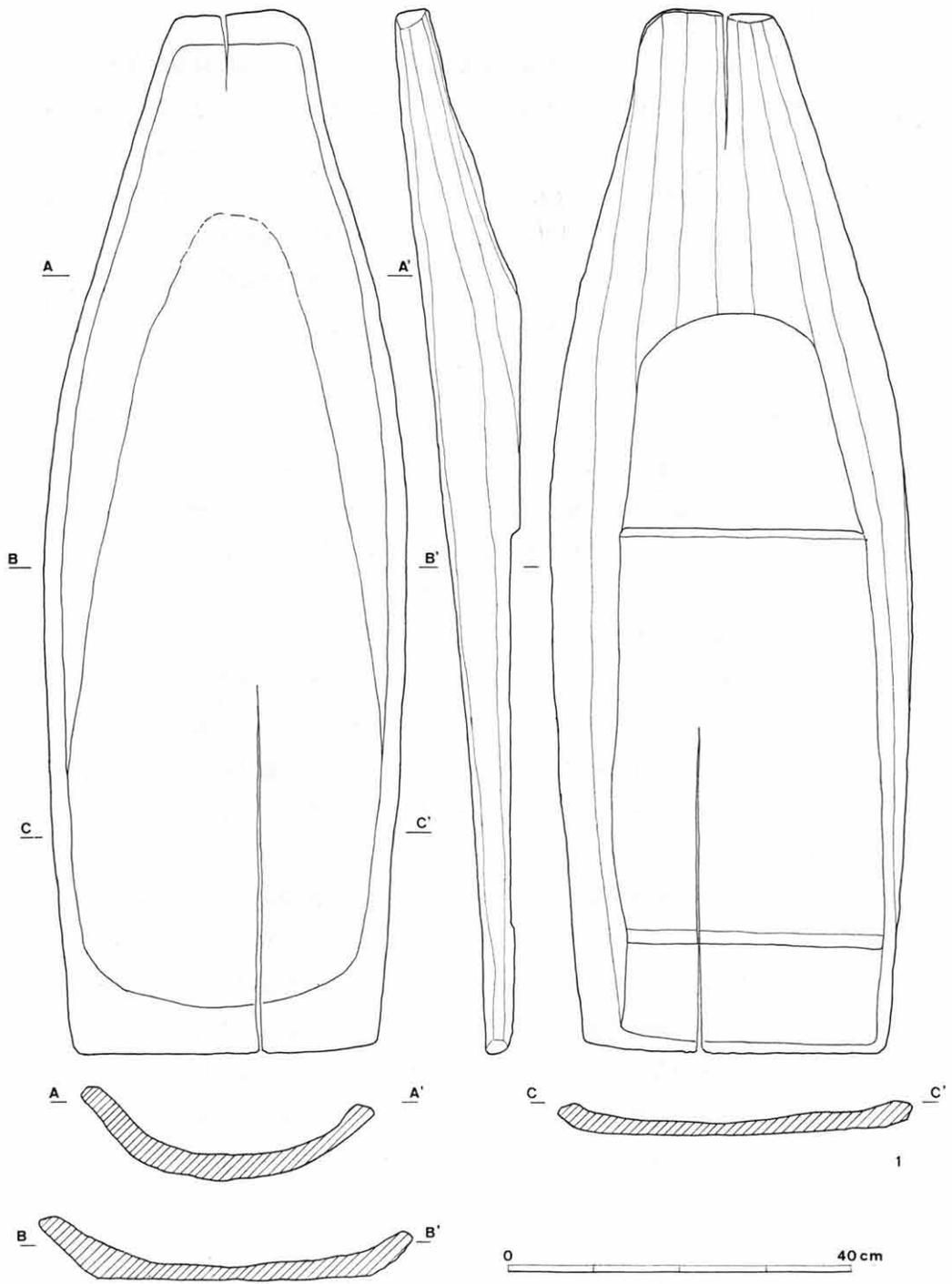
木製品には前述の堰板・立杭のほか、形態及び性格が明らかなものとして船型木製品・鋤型木製品・梯子型木製品がある。

船型木製品は堰の前面約3mに、北東方向に舳先を向け反転した状態で出土した。船型木製品は全長118.8cm・最大幅約42.5cm・厚さ約3.2cmを測り、1本の丸太を削り抜いて製作されている。舳先部はわずかに反りをもち、尖りぎみとなる。艫は船部中央より同じ幅で続き、反りをもたず平坦となる。船部の削り抜きは舳先部の反りに沿い厚さを等間隔にするため船部中央に向って深く削り抜く。船体裏面には木材の反りの防止・水面の抵抗を少なくするため、長さ約47cm・幅約39cm・深さ約1～2cmの段を設ける。表面には調整痕が顕著であり、特に体部前半部の削り抜きの際の調整痕が顕著である。

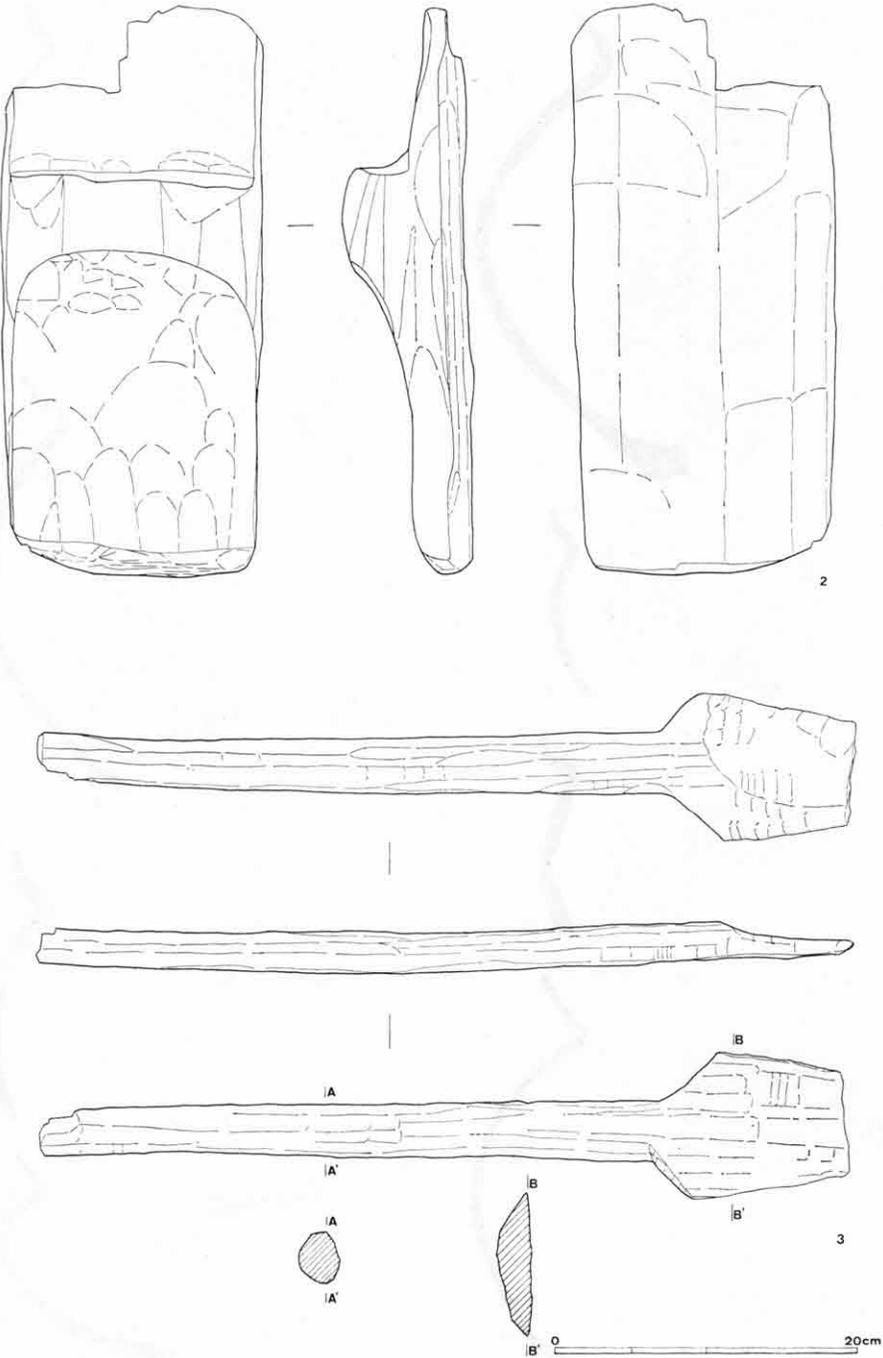
鋤型木製品は堰の前面、船型木製品に隣接して出土した。現存長54cmを測り、柄部及び先端部は欠損している。柄部の断面は円形に近く、ていねいな面取りを行う。刀部は柄部より鈍角に広がり左右対象形をなさない。刀部断面は山形を呈し、厚さ約2cmを測る。

梯子型木製品は堰の下流約3mで表面を上にして出土した。梯子型木製品は削り出しにより成形し、現存長約45cm・幅約18cm、蹴上げ部の厚さ約4cm、踏み込み部の厚さ約9cmを測る。踏み込み部は上部を直角に、下端はやや曲線をもって削り込み、断面カマボコ形を呈する。蹴上げ部は下端より約26.8cmを測り、下端はていねいに切断される。下端の切断痕より梯子の最下段のみ遺存したものである。梯子型木製品はこれまで報告されている出土例^(注3)より5段程度と考えられ、推定全長約1.7mと思われる。

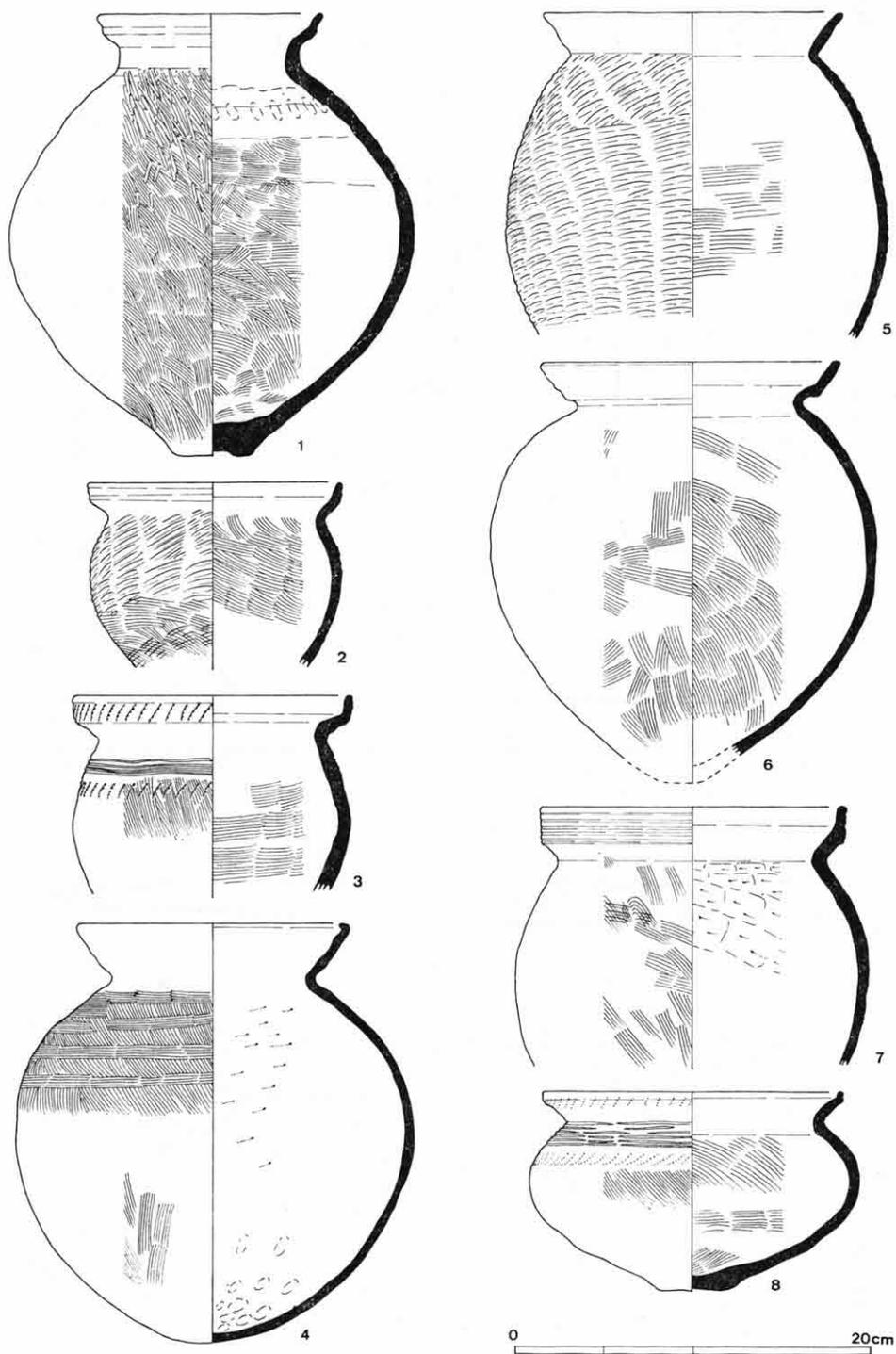
土器は現在整理中であり、今後詳細に検討していきたいが、現時点での大要を述べると、



第4図 大溝出土の船型木製品



第5図 大溝出土の梯子型木製品・鋤型木製品



第6図 大溝出土土器

出土総数はコンテナ・バット150箱以上を数え、その内弥生時代後期後半～庄内併行期が全体の80%以上をしめ、縄文晩期・布留式併行期の土器を少量含む。出土土器を各器種別にみると、甕形土器が40%以上をしめ、壺形土器・鉢形土器が10～20%をしめる。出土総数の多い甕形土器をみると3種類に大別できる。A類は口縁部が単純「く」の字に外反し、口縁端部へそのまま続くもの(5)と口縁端部をわずかにつまみ上げるもの(2)があり、いずれも体部外面は叩き、内面は刷毛調整を行う。B類は頸部より外反する口縁部へ続き、口縁部中央で上方ぎみに立ちあがる「受け口状口縁」を呈し、口縁部外面には無文のものと、櫛描列点文を施すもの(3)があり、後者には体部外面に直線文・列点文を施す。C類は口縁部中央で屈曲し、垂直あるいは外反ぎみの口縁端部へ続く「複合口縁」で、口縁部外面には3～4条の擬凹線文を施すもの(7)と施さないものがある。甕形土器A・B・Cの出土比率をみると、A類が約40%と主体をしめ、次にB類が約30%、C類が約20%をしめる。

布留式併行期の土器(4)は堰の周辺に集中し、特に船形木製品に近接して完形に復元しえる甕が出土した。

5. ま と め

北金岐遺跡で検出された大溝の概略は以上のとおりである。

大溝は弥生時代後期～庄内併行期に自然流路を利用して掘削され、布留式併行期には溝幅を縮小し、一部改修・堰の構築を行う。

堰は大型の板材を横板とし、立杭・板材・栗石・粘土により堰の固定を行う。堰板は溝に直角に据え、上流(西方)からの水量調整・水位上昇を、中央堰板の切り込みは逃げ水を意図したものである。大溝の水量については推定の域を出ないが、堰板の高さより推察し、河床面より50～60cmの高さまでと考えられ、平時には大溝の規模に比し水量は少なかったと考えられる。

大溝の性格については、当初SB02・SB03の2基の竪穴式住居跡が確認され、2基の竪穴式住居を囲む環濠と考えられていたが、調査が進むにつれ大溝の南側で新たな竪穴式住居跡は確認されず、大溝の北側で新たに1基の竪穴式住居跡(SB15)が確認された。また大溝も調査地東端で北に向かって曲折し、当初考えられた環濠と考えるよりも、集落と生産場所(水田面)を結ぶ水路であり、大雨の際には集落を守る排水施設を意図したものと考えられる。

大溝は出土土器より布留式併行期以降、短期間に埋滅され、埋滅に際し溝上面に堆積した土器だまりも含め、埋め戻したものと考えられる。

大溝より出土した木製品は資料が少なく、集落全体での木製品の様相は明らかでないが、用途・器形が明らかな木製品が堰に近接して出土した。

船型木製品は形態・規模より湿田地の上で物資・泥を運ぶ田舟として使用されたものと思われる。田舟については小形の丸木舟状のものと平面楕円形の槽状のものがあり、^(注4)本例は形態的には前者に属する。農具としては田舟のほか鋤型木製品が出土しており、田舟とあわせ、湿田地の開発・耕作が予想される。梯子型木製品は踏み部が1段のみ遺存し、全体の様相は明らかでないが、梯子が高床式倉庫の付随施設であることより、検出された3基の堅穴式住居とともに高床式倉庫があったと予想される。また高床式倉庫に収納される物資としては大溝の埋土内に多量の植物遺体があり、今後花粉分析により栽培植物の有無・種類が明らかになるとと思われる。

(石井清司・森下 衛＝当センター調査課調査員)

注1 田代 弘「太田遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第5号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982.9

注2 水谷寿克・村尾政人・引原茂治「国道9号線バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注3 栗原和彦ほか『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集—福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査— 福岡市教育委員会 1976

注4 木下 忠「木器」(『新版考古学講座』4 原始文化(上)) 雄山閣 1979

七尾南古墳群について<図版2・3>

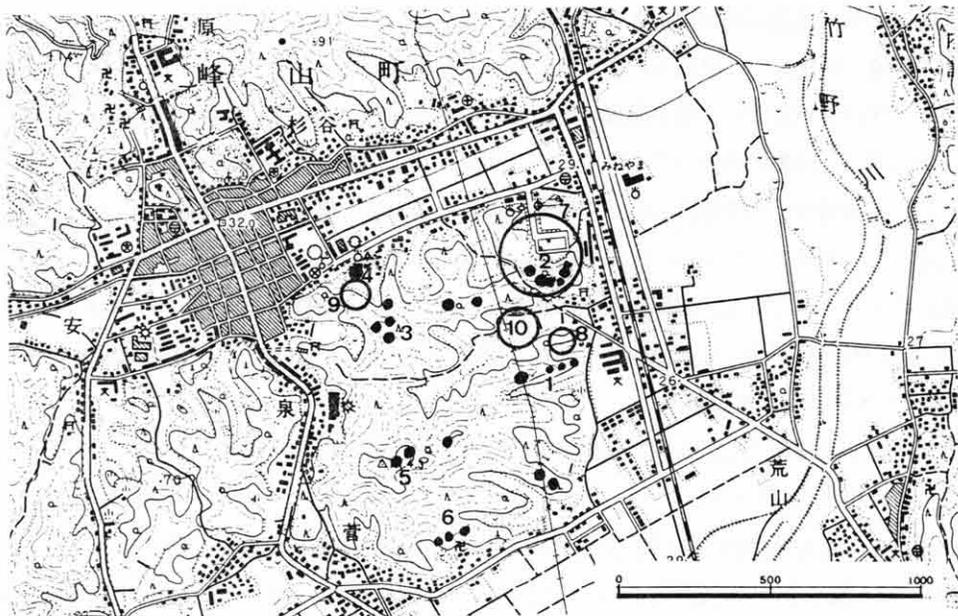
田中光浩

1. はじめに

丹後の古代文化は、沿岸・河川流域を中心に展開しているが、中でも、半島を貫通する竹野川流域には、数多くの遺跡・古墳が存在し、狭谷によって区切られた沖積地には、それぞれに、地区の核となる遺跡の存在が考えられ、関連を持ちながら展開していたと思われる。

竹野川の中流域にある峰山町には、二つの支流に挟まれ、東西に大きく発達して沖積地に張り出した樹枝状の丘陵がある。この丘陵には、弥生時代前期末から古墳時代にかけての遺跡・古墳が点在しており、地区内で、古代の人々の足跡が辿れ、文化の展開を知る上で重要な地の一つである。これらの遺跡を年代順に列挙すると、

弥生時代の遺跡では、前期末から中期初頭にかけての高地性集落と考えられる扇谷遺跡^(注1)、扇谷集落の墓域と思われる七尾遺跡^(注2)の台状墓、中期中葉の台状墓3基、後期の周溝墓2基



第1図 七尾南古墳群周辺の遺跡

- | | | | |
|-----------|------------|-------------|----------|
| 1. 七尾南古墳群 | 2. 八幡山古墳群 | 3. 金刀比羅山古墳群 | 4. カジャ古墳 |
| 5. 愛宕山古墳群 | 6. 舟泉寺横穴墓群 | 7. 扇谷遺跡 | 8. 七尾遺跡 |
| 9. カジャ遺跡 | 10. 八幡池遺跡 | | |

が検出されたカジャ遺跡^(注3)、後期の土器・木製品が出土し集落跡と考えられる八幡池遺跡^(注4)などがある。

前期古墳としては、長径 73m の大型円墳、カジャ古墳^(注5)がある。カジャ古墳からは、筒形銅器・方格変形獣文鏡・石釧・鍬形石・車輪石・鉄剣・土器・ガラス玉などが出土し、4世紀後半の築造と考えられている。中期のものとしては、前方後円墳 2 基、円墳 2 基からなる八幡山古墳群、壺棺を伴い、4世紀末から5世紀初めの埋葬と考えられる七尾南古墳群、後期としては、丘陵稜線上に点在する金刀比羅山古墳群・愛宕山古墳群・舟泉寺横穴墓群などが確認されているが、調査によって、さらにその数を増すことが予想される。

これら遺跡・古墳の内、報告書等によって、よく知られているものもあるが、壺棺が検出された七尾南古墳群の概要についてふれてみたい。

2. 七尾南古墳群

七尾南古墳群は、前述の樹枝状丘陵の東端支丘上に位置し、平地部との比高は 28~35m であるが、竹野川が形成した沖積地の大半が眺望できる地にある。この支丘は、昭和49年の頃、開発工事によって、稜線の北側が約 200m にわたって削り取られ、自然地形の残存状態はきわめて悪かったが、稜線上には墳丘と思われるものが存在していた。

昭和56年、発掘調査が実施されその結果、3基の墳墓と1基の土壇墓が検出された。

1号墳 丘陵東端に位置し、西方向に向って階段状の地形となっている地点であるが、テラス状の平坦面で、主軸が北東-南西方向の埋葬施設 2 基を検出した。東に位置する第1主体部は2段掘り込みとなっており、上部長さ 6m・幅 2.7m・深さ 0.7m を測り、地表に近い南東隅で壺棺を検出した。壺棺は、広口の壺と壺上部を欠いた底部とを合口し、両底部とも円形状に打ち欠き、穴部を脚を欠いた高杯で覆っていた、高杯の内部には、赤色顔料が塗付されていた。主体部の底部北側には、横長の穴が掘りこまれ、その南には、脚部を欠いた高杯が上にして置かれていた。第2主体部も2段掘り込みで上部長さ 6.3m・幅 2.8m・深さ 1.0m を測る。

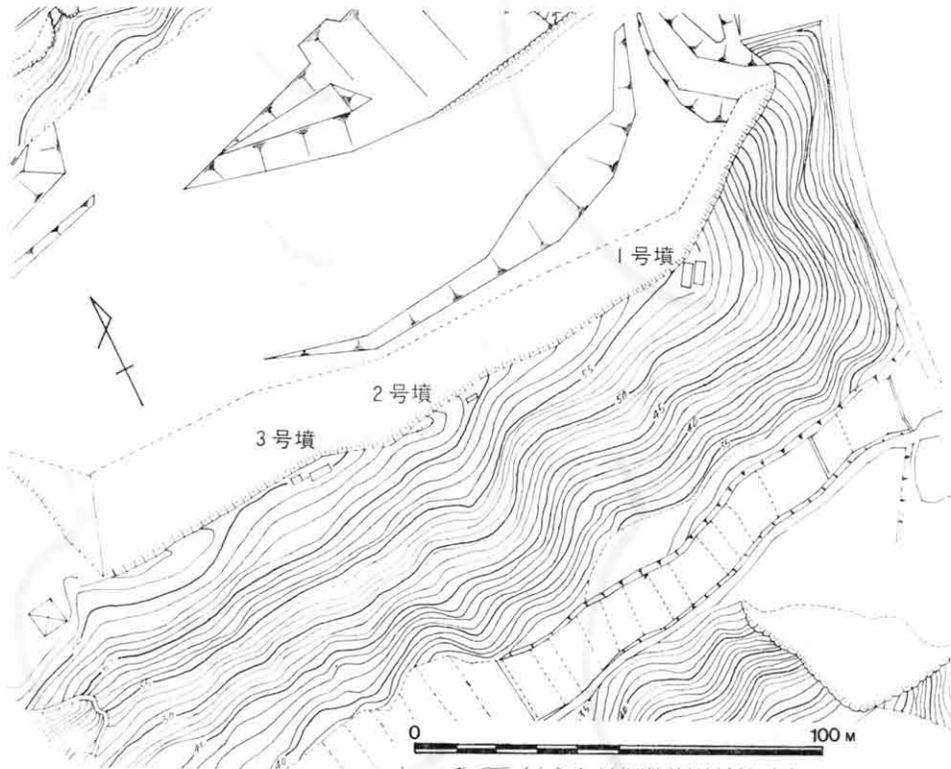
第1・2主体部ともよく似た規模・構造であり、埋葬は組合せ木棺と考えられる。副葬品は全く出土しなかった。

土壇 1 1号墳の西 55m 地点、東に向って緩やかに下る斜面で検出した。長さ 2.1m・幅 1.0m・深さ 0.3m の長楕円形の土壇である。底部には長さ 0.45m・幅 0.25m・深さ 0.3m の穴が穿たれていた。出土遺物はなく、不整形で粗雑な掘り方ではあるが埋葬施設と考えられた。

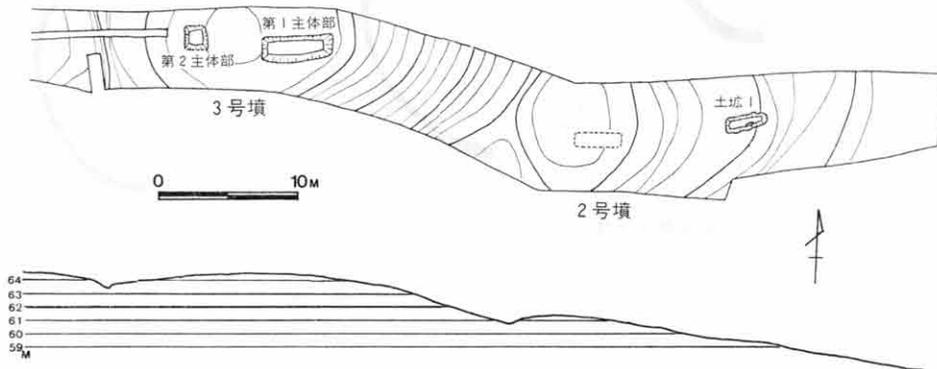
2号墳 1号墳の西 70m に位置する墳丘である。墳丘の西側は稜線に直行して溝を掘り

西へ続く斜面より分断しているが、東・南面は自然地形を残す。墳丘には赤褐色の粘土層が走り、遺構・遺物は検出できなかったが、平坦面で長方形の粘土層の乱れがあり、埋葬施設と考えられた。

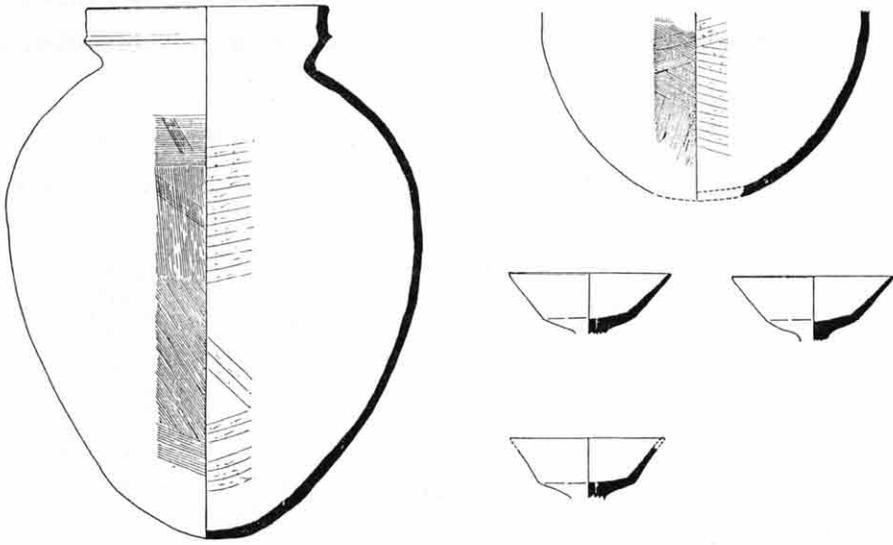
3号墳 2号墳の西25mに位置し、直径20m・高さ1.5mを測る墳丘である。墳丘西側は、稜線に直行して溝を掘り、西へ続く尾根から切り離して区分しているが、東・南斜



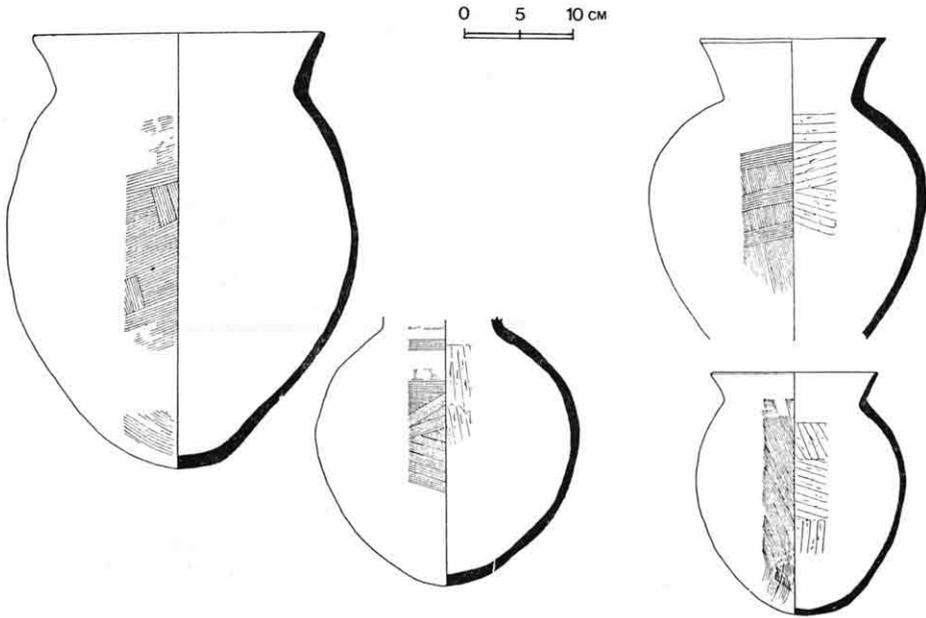
第2図 七尾南古墳群地形図



第3図 2・3号墳主体部位置図



1号墳第1主体部



3号墳第1主体部

3号墳第2主体部

第4図 出土土器実測図

面は自然地形を残している。3号墳では、2基の埋葬施設を検出した。第1主体部は主軸が東一西方向の長方形で、上部長さ5.0m・幅1.8m・深さ0.95mを測り、底部は平坦である。主体部の北東隅の表土に近い位置で壺棺を検出した。壺棺は小形の壺形土器の口縁部を欠いて大形壺形土器に合口していた。第2主体部は、長さ1.8m・幅1.7mの方形状で、深さ1.3mを測る。底部のほぼ中央には壺棺が置かれていた。壺棺は、壺形土器と甕形土器を合口していた。合口部分は甕の口縁部を打ち欠き、壺の口縁部も大きく欠いてはめ込み、別の破碎した壺胴下部で覆っていた。また、棺に使用した壺下部も大きく打ち欠き、他の壺下部片で覆っていた。3号墳からは、壺棺のみで、副葬品等の遺物は全く出土しなかった。

3. ま と め

七尾南古墳群では、3基の墳丘と1基の土塚が検出された。1号墳は上部が削平されており築造は明らかでないが、2・3号墳は、尾根稜線に直行して溝を掘り、西方尾根から切り離し、低い墳丘を形づくるが、東・南斜面は自然地形を残している。墳丘上部は主体部検出状態からみて若干の盛土を行っていたと思われる。

埋葬施設は、長方形の2段構造のもの、方形のものがあるが、1号墳では、木口板の掘方と思われるものもあり、組合せ木棺が想定される。また、1・3号墳とも、第1主体部片隅に小児用と考えられる壺棺が埋葬されており、構成から家族墓と思われる。墳墓築造の時期は、4世紀末から5世紀初頭と考えられ、3基の墳墓とも大きな時期差はないものと思われる。

七尾南古墳群は、立地・墳墓の築造方法・埋葬形態・時期などから、同一集落内における家族墓とみることができる。土塚1については、遺物もなく、埋葬状況も他と異なるため時期を定めることができないが、周辺遺跡の関連から弥生時代の可能性を残す。また、土塚底部の穴については、七尾遺跡にその例を見ること^(注2)ができる。

以上が七尾南古墳の概要であるが、同一樹枝状丘陵にある八幡山古墳群・金刀比羅山古墳群の円墳と築造方法が異なり、これが何に起因するのか今後の課題である。

(田中光浩＝京都府文化財保護指導委員)

注1 『扇谷遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会 1975

注2 『七尾遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会 1982

注3 『カジャ遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会 1978

注4 神尾恵一「京都府竹野川流域(中郡)の弥生式遺跡」(『同志社考古』9) 1972

注5 『カジャ古墳発掘調査報告書』 峰山町教育委員会 1972

昭和58年度発掘調査略報

13. 千代川・桑寺遺跡

所在地 亀岡市千代川町千原小字千原ヶ前1番地・北ノ庄小字桑寺5番地
調査期間 昭和58年9月19日～昭和59年3月13日
調査面積 約 2,400 m²

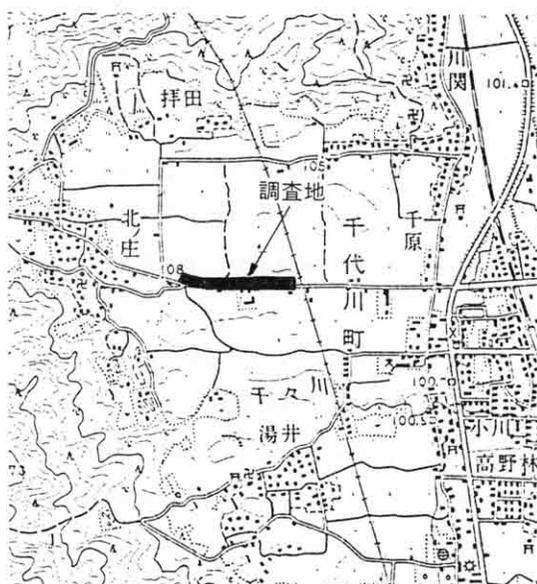
はじめに 大堰川の西岸，行者山の北東麓に形成された扇状地上は以前から弥生時代～平安時代にわたる遺物の出土が報告され千代川遺跡として知られていた。またこの千代川遺跡の北半部を丹波国府推定地とする説が現在最も有力視されており，国府推定域内には奈良時代の寺院跡（桑寺廃寺）の存在も想定されていた。

今回の調査は，上記の千代川遺跡さらには国府推定域・桑寺廃寺の一面を横断する府道（北ノ庄・千代川停車場線）の道路改良（拡幅）事業に先立って行ったものである。

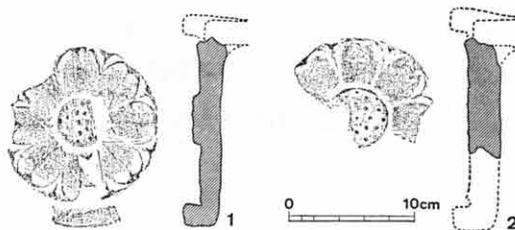
調査概要 今回の調査では，調査地内に15か所のトレンチを設け掘削を行った。その結果，調査地は西から東へ下る地形を呈しており，そこに水田が形成されているために削平や盛土がくり返し行われていた。し

かし基本的には，耕土・床土・暗灰色砂質土・黒灰色砂質土・黒色粘土・黄灰色粘土もしくは砂質土という層序をなしており，遺構は黄灰色粘土もしくは砂質土上面で検出した。

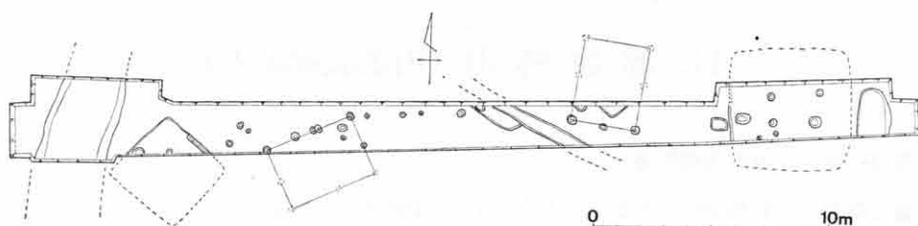
検出した遺構は，おおよそ東半部での奈良時代を中心とするものと，西半部での弥生時代を中心とするものに大別することができる。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 桑寺廃寺出土軒丸瓦



第3図 第9トレンチ平面図

東半部では、従来桑寺廃寺の名残りと言われてきた土壇付近に青灰色粘土の広がりが見られた。そしてその東端からは築地状遺構を検出し、その西端部は約30cmの段をなして下がり、下がった部分から掘立柱建物跡を3棟検出した(第2・第3・第4トレンチ)。

これらの遺構は、桑寺廃寺に関係するものであろうと考えられる。またこれらに伴って多量の須恵器・土師器・古瓦等が出土しているが、中には「寺」・「吏」と判読できるものをはじめとして墨書土器が5点含まれていた。さらに出土した軒丸瓦から、桑寺廃寺の創建が7世紀後半でも古い段階まで遡りうるものであることが判明した。

西半部では、弥生時代中期の遺構群を検出した。第4・第5・第7トレンチからそれぞれ方形周溝墓を、また第9・第13トレンチから集落跡の一部(竪穴式住居跡3基・掘立柱倉庫跡3棟)を検出した。

さらに第6トレンチからは、旧河道を検出した。この旧河道の下層からは弥生時代中期の土器、中層からは布留式併行と考えられる古式土師器、上層からは奈良時代の土器や舟状木製品をはじめとする多くの木製品などが出土した。また奈良時代の須恵器には、「田邊」と判読できる墨書土器が1点含まれていた。

まとめ 検出した遺構の正確な規模も不明な場合が多い。限られた面積の調査ではあったが、上記のような多大な成果を得た。それらをまとめると、

(1)検出した桑寺廃寺関係の遺構・遺物は、従来推定にすぎなかった桑寺廃寺の存在を確実なものとするとともに、その創建の時期や規模を知る上で貴重な資料を得た。

(2)国府関係の遺構(条坊の痕跡)は検出できなかったものの、大半のトレンチから奈良時代～平安時代にわたる土器類が出土しており、特に第6トレンチの旧河道から出土した墨書土器などの遺物は桑寺廃寺との関係で考えるよりも国府との関連を重視すべきであろうと思われる。

(3)弥生時代中期の集落跡に伴って出土した土器類は、当地方では空白に近かった時期の資料を埋めるものであり、今後当地方の弥生文化を考える上で不可欠な資料を得た。

以上の3点に要約できる。

(森下 衛)

14. 篠窯跡群 (田畑試掘調査)

所在地 亀岡市篠町篠・王子

調査期間 昭和58年5月25日～6月30日, 昭和59年2月6日～3月28日

調査面積 約 1,400 m²

調査概要 今年度は、掛ヶ谷C地区、芦原B地区、西長尾A・B地区の田畑の試掘調査を行った。

(1)掛ヶ谷C地区 丘陵裾部に広がる田畑に6本のトレンチを設定し掘削を行った。その結果、調査範囲の西端に設定したトレンチから、厚さ10cm程の灰原を検出した。その範囲は不明であるが、灰原内から平安時代の須恵器片が少量出土している。

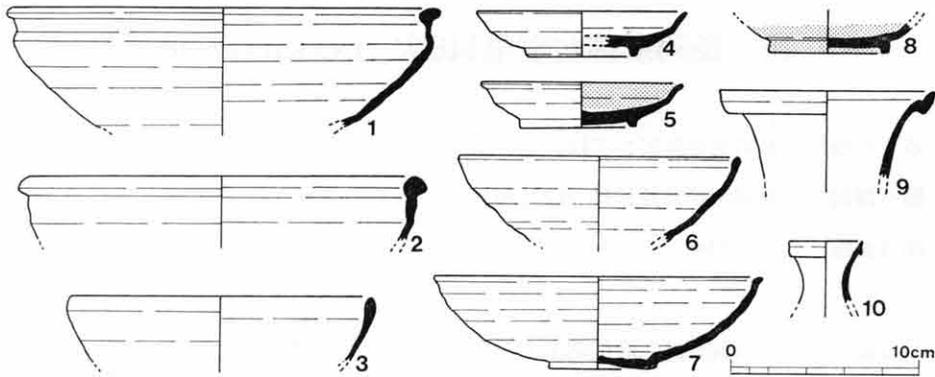
(2)芦原B地区 昭和55年度に芦原1・2号窯の調査が行われている。1号窯は、平安時代前期の登り窯である。当初灰原の検出により2号窯の存在が推定されたが、それは1号窯の灰原の2次堆積であることが判明している。その時の調査では、灰原の範囲確認を行っていないため、今回はその調査も含めて行った。11本のトレンチを掘削した結果、芦原1号窯北側の池から土手下の荒地にかけて、灰原を確認した。その他のトレンチには、灰原や窯跡などはなく、芦原1・3号窯が位置する丘陵は、現地形よりも東北方向に張り出していたことを確認した。

(3)西長尾A・B地区 この地区は、谷川をはさんで緩傾斜地が北側にのび、西長尾C地区から流れる谷川との合流点付近から、一段低い田畑が広がる。地区割りは、北流する谷川よりも西側がA地区、東側がB地区となる。

A地区では、田の畦に沿って10本のトレンチを設定し掘削を行った。調査の結果、一段低い田畑から緑釉陶器片や須恵器片が出土したため、山手にあたる緩傾斜地には、平窯(三角窯)があるのではないかと考えられた。しかし、トレンチを設定し掘削したが、緑釉陶器を焼成する三角窯は見つからなかった。平坦地からは、柱穴が4か所で見つかり、



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 西長尾A・B地区灰原出土遺物

南端に設定したトレンチでは、南北1.1m・東西0.9mの範囲で須恵器が密集する遺構を検出した。この遺構の周囲には、うすい焼土が巡っていた。これらの遺構の出土遺物は、芦原1号窯出土遺物に類似するもので、平安時代前期のものである。

B地区もA地区と同様の地形を呈する。計6本のトレンチを設定し調査を行ったところ、緩傾斜地部分は山手からの土砂の堆積によるもので、もとは小さな谷状の地形であったことが判明した。山手からの堆積土内に須恵器片が混入していたことから、調査地の南側には登り窯があるものと考えられる。また一段低い田畑部分にもトレンチを設定し掘削を行った。その結果、南北2.5m・東西8mの範囲で灰原を検出した。この灰原は、田畑を作る際に削平されており、一部分が残っているのみであった。出土遺物は、黒岩1号窯のものと類似し、10世紀中葉頃のものである。(第2図7以外はこの灰原からの出土遺物)なお、この灰原に伴う窯体は、後世の削平を受け残存しない。

まとめ 今回の試掘調査の結果、新たに掛ヶ谷C地区と西長尾B地区で灰原を検出し、また芦原1・3号窯の灰原の範囲が、北側に広がることを確認した。西長尾A地区に関しては、平安時代前期の土器を含む柱穴や同時期の土器が密集する遺構を確認しており、緩傾斜地部分には、何らかの建物があったものと考えられる。隣接する西長尾C地区の丘陵上からも柱穴を検出しており、作業場跡と考えていることから、西長尾A地点の平坦地にも、平安時代前期頃の作業場跡があった可能性がある。

(引原 茂治・岡崎 研一)

15. 長岡京跡右京第148次 (7ANKHT-2 地区)

所在地 長岡京市開田3丁目
調査期間 昭和58年11月10日～12月26日
調査面積 約 75 m²

はじめに 今回の調査は、府道開田・神足線を拡幅し、交通安全施設（歩道）を造成する工事に先立って実施したものである。この近辺の発掘調査例は多く、古墳時代後期の方墳とされる塚本古墳の調査、五条大路とその両側溝の検出、さらに掘立柱建物跡等も検出されている。今回の調査地は、長岡京跡の条坊復原図によれば、六条二坊八町に推定される地であり、南北の東二坊坊間小路と東西の五条大路が付近で交差する。その他に、塚本古墳に関係する遺構・遺物の存在や、東へ約20mの所を南北に流れる犬川の影響等も予想された。

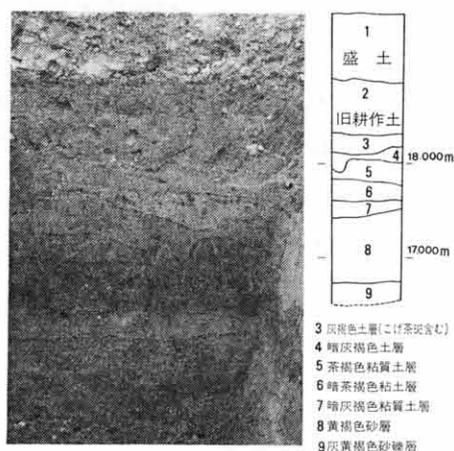
調査概要 狭い調査面積であったが、長岡京期の掘立柱建物跡1棟、古墳時代後期～中世にわたる溝状遺構等を検出した。

発掘区南西隅の層序は、第2図のとおりである。現地表下より約1.2m（東にいくほど浅い）の床土直下から地山の黄褐色砂層までに、中世から弥生時代の遺構および遺物が包含されている。長岡京期の層は5・6と考えられる。全体に西にいくほど緩やかに傾斜している。暗茶褐色粘（質）土の堆積は、発掘区中央部付近で最も厚い。

掘立柱建物跡は、東西5間・南北1間分を確認した（第3図）。柱心間の寸法は、7尺



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 発掘区南西隅土層断面

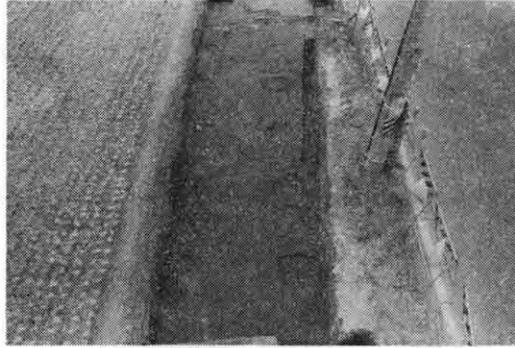
(約 2.1 m)である。埋め土は、主に暗茶褐色粘土であり、柱の抜き取り痕と思われる部分には、黄褐色砂礫混じり粘質土が詰っており容易に識別できる。断ち割りによって柱芯の確認を可能な限り行ったが、削平を受けたものか、掘形の深さも浅く(平均 20cm)、判別し得ないものもあった。なお、遺物は抜き取り痕部分から、わずかながら出土している。以上の点から本遺構は、建物の南側廂を構成する柱穴と考えられ、北側には母屋部分の柱穴が存在すると思われる。この場合、五条大路南側側溝との位置関係が微妙なものとなる。右京第96次調査で、五条大路南側側溝にほとんど隣接して掘立柱建物跡が検出されており、今回の建物跡との位置関係を考慮する必要がある。

溝状遺構は、南北方向に走る深さ約 30 cm・幅約 50 cm のもの (SD 14801) が最も残りが良く、須恵質の埴輪片を始め、ミニチュアカマド?, 須恵器壺・杯等が出土している。これらの遺物は、塚本古墳の時期から奈良時代までのも

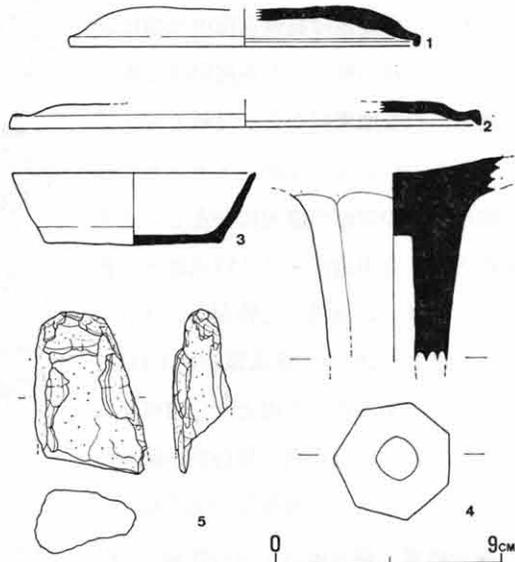
ので、かなりの時期幅がある。なお、上層遺構として中世の溝も多数確認している。

遺物は、2・3層の包含層中から瓦器碗片・陶器甕片に混じって長岡京期の須恵器杯B・壺片が出土しており、4層直上に掘り込まれた土塚からは、土馬・杯蓋等が出土している。また、掘立柱建物跡の柱抜き取り部から高杯脚部・須恵器杯蓋・石斧片等が、さらに下層の7層直下では、打製石斧の破砕片が出土している。

先に述べたように、開田地区での調査例は多く、遺構・遺物を充分整理して取り組まなければならないが、この地域を総合的に研究する意義は大きい。(黒坪 一樹)



第3図 掘立柱建物跡検出状況(西から)



第4図 出土遺物実測図

- 1・2. 須恵器杯蓋 3. 須恵器杯
4. 土師器高杯脚部 5. 打製石斧
(2・3・4・5: 柱穴内出土 1: 土塚内出土)

16. 長岡京跡右京第153次 (7ANIAE 地区)

所在地 長岡京市今里4丁目・赤ノ上
調査期間 昭和58年12月9日～昭和59年2月2日
調査面積 約 180 m²

はじめに この調査は、府道長法寺・向日線拡幅工事に先だって行った発掘調査である。調査地は長岡京市の北端に近く、西山丘陵の裾に広がる河岸段丘端に立地し、調査地東縁から一段低くなっている。この付近は段丘の上・下ともに弥生時代以降の遺跡が濃密に分布し、大字名をとって今里遺跡・井ノ内遺跡と呼称され、数多くの遺構・遺物が検出されている。また、長岡京の推定復原によれば、右京域の二条三坊の五町と十二町にまたがり、調査地付近を西三坊坊間小路が南北に設定されている可能性がある場所でもあった。



調査地位置図 (1/50,000)

調査概要 調査地は工事の性格上、現在、使用されている道路を挟んで北（B・Cトレンチ）と南（Aトレンチ）に、東西に長い2本のトレンチを入れる形となった。現在は竹林となっており、一部は塵芥捨場とされていた。表土・木株は重機で除去し、それ以外は人力で掘削した。Aトレンチでは東側で暗赤褐色土層（混小礫）において、大小のピットおよび土坑を検出した。時期は古墳時代のものと、奈良時代のものである。ピットは並ぶと考えられるものが2か所あるが、調査幅が狭く、全体は把握できない。またトレンチ壁際の土坑も、竪穴式住居跡の様相を示すがこれも断定しきれない。B・CトレンチからもAトレンチと同様にピット・土坑を点々と検出したが、ピット等でまとまりを示すものはない。土坑は古墳時代後期のものもあるが、各遺構とも伴出する遺物は小破片が多かった。

遺物には、須恵器・土師器・弥生土器・瓦器・瓦などがあり、時代も弥生時代から中世まで認められる。しかし、長岡京期の遺構は確認できなかった。（長谷川 達）

17. 長岡京跡右京第156次 (7ANSNM 地区)

所在地 乙訓郡大山崎町円明寺夏目21番地
 調査期間 昭和59年2月13日～3月2日
 調査面積 約 80 m²

はじめに 今回の調査は、府道下植野・大山崎線の道路拡幅工事に伴うものである。調査地は、阪急大山崎駅から西国街道を約800m北上し、^{ほうじき}傍示木付近の交差点から約200m程東進した夏目浄水場前である。調査地の地形は、標高9～11mの平坦地で、小泉川の後背湿地にあたる。長岡京条坊復原図によれば京城南限から200m程南へ外れているが、周辺の遺跡には傍示木古墳・久我堰等があり、また、過去の調査で奈良時代の掘立柱建物跡・溝等が検出された^{とど}百々遺跡がある。

調査概要 調査区については、計画長85mの道路拡幅部に限られ、幅1.2m・長さ10～20mのトレンチを4本設定した。掘削は1.3mまで重機を使用し、それ以後の作業は手掘りで行ったが、壁面の崩落が激しいため地表下2.3mで終了した。

土層堆積状況は、表面のコンクリート板以下、①旧耕作土・床土、②淡黄灰色粘質土層、③灰色砂礫と青灰色粘質土の互層の順である。コンクリート板は夏目浄水場の擁壁で、高さ60cm・厚さ30cmを測る。①層は暗灰色を呈する厚さ20～30cmの腐植土で、近隣の水田面と連なるものである。②層は厚さ30～40cmで水平堆積し、単一の粘質土であることから、①層以前の水田面である。少量の土師器片を含む。③層は地表下1.2～2.3m以上

上を測り、青灰色粘質土が厚さ10～15cmのレンズ状を呈している。砂礫は小礫から拳大まで混ざり合っている。遺物は土師器・須恵器片のほか、天目茶碗の小片が出土している。

まとめ 今回の調査では、流路あるいは氾濫原と考えられる土層(③層)を確認し、共伴する土器片を採集した。これらの成果は、トレンチが狭小なため充分ではなかったが、今後の調査をまって複雑な旧地形を復原し、あわせて長岡京域の南縁部の実態を明らかにしていく必要がある。(竹井 治雄)



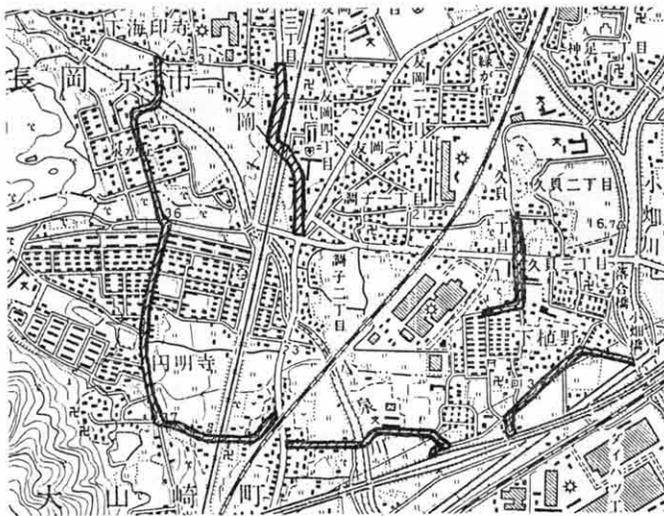
調査地位置図 (1/50,000)

18. 長岡京跡 (立会調査)

| | |
|------|----------------------------------|
| 所在地 | 長岡京市下海印寺・友岡・久貝 乙訓郡大山崎町円明寺・下植野 |
| 調査期間 | 昭和58年1月15日～昭和59年3月31日 |
| 調査面積 | 約 1,550 m ² |

はじめに この調査は、日本電信電話公社による電話線の地下埋設工事に伴う立会調査である。工事による掘削幅は極めて狭小なものであるが、それが、長岡京跡を縦横に走るとともに、それ以外にも友岡・松田遺跡等を貫通するため、工事の進行に合した立会調査を実施し、遺構・遺物の有無、遺跡の広がり等を確認することを目的とした。長岡京跡の推定復原では、右京域で、北は六条大路、南は九条大路付近にわたっている。

調査概要 掘削は長岡京市下海印寺から開始され、大山崎町円明寺へと南下した。この付近は住宅開発が著しく、黄褐色系の粘質土・砂質土が道路盛土下に見られ、大きく削平を受けている部分が多かった。しかし、円明寺団地北側で、周辺が竹林として残っている所では地山面までに15～20 cmの厚さで茶褐色粘質土があり、付近が削平・攪乱を受けていない様子が観察できた。友岡の丘陵部では粘性のある黄褐色砂礫層より、土師器小皿・須恵器・瓦片が出土し、東側に存在する友岡廃寺との関連を想定させる資料を得られた。長岡京市調子付近では、遺物は採集できなかったが、遺物包含層を類推させる土層が遺存



調査地位置図 (1/25,000)

していた。また、大山崎町下植野では、平安時代の包含層、古墳時代の包含層が検出できた。遺物には土師器の壺・甕・高杯等がある。調査を通して点在する遺物包含層を確認し得たことに加え、広域にわたる土層観察は、今後の調査の基礎資料になるものと考えられる。

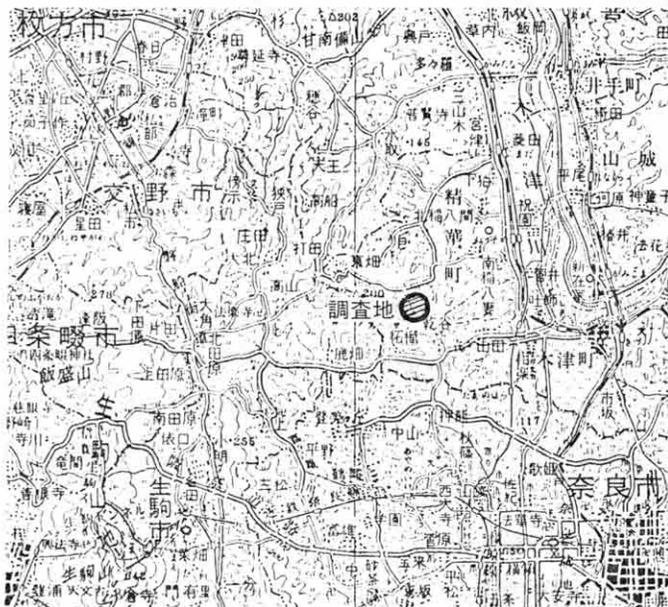
(長谷川 達)

19. 精華町祝園地区遺跡

所在地 相楽郡精華町大字南稻八妻・東畑・乾谷・柘榴
 調査期間 昭和58年5月23日～昭和59年3月30日
 調査面積 約 1,900 m²

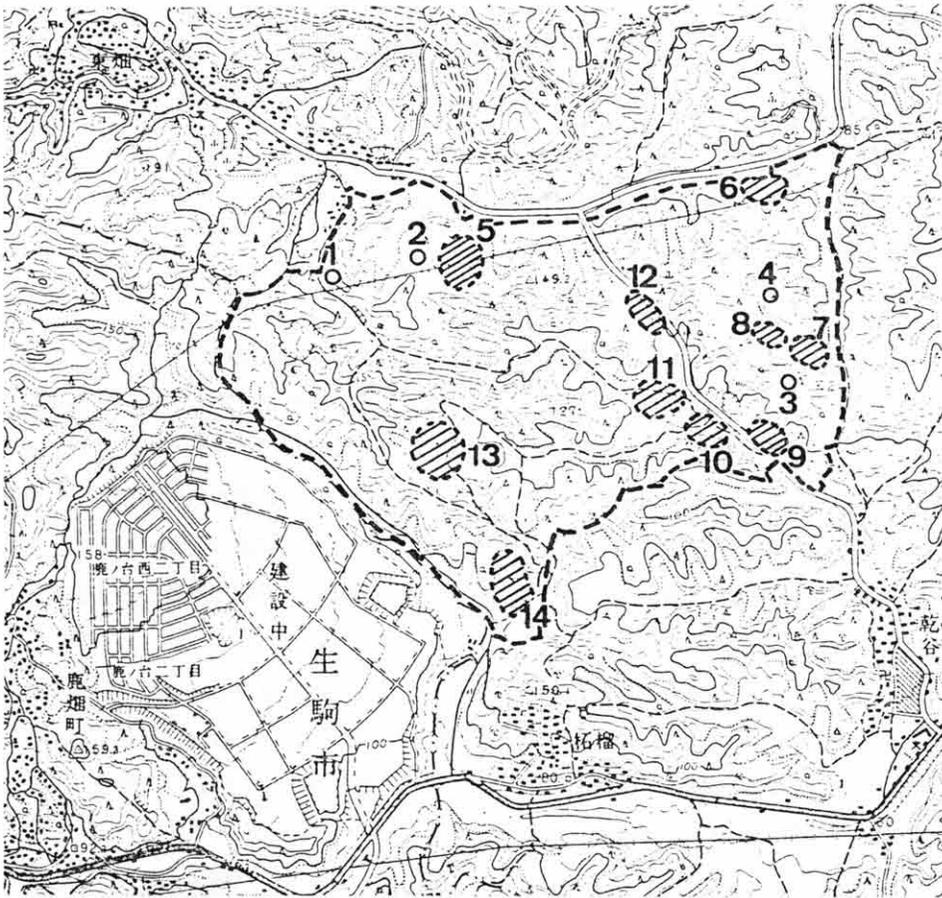
はじめに この調査は、住宅・都市整備公団の祝園地区^{ほうその}の宅地開発に伴うものである。調査対象地は、相楽郡精華町大字南稻八妻・東畑^{みならいなやづま}・乾谷^{ひがしはた}・柘榴^{いぬいだに}に所在し、西は奈良県生駒市に接し、北と南は東流して木津川に流入する煤谷川・山田川に囲まれた、精華町の南西部にあたり、東西約 2 km・南北約 1 km におよんでいる。いわゆる京阪奈丘陵の東端部分で、標高 60～170 m の丘陵部分と煤谷川・山田川・乾谷川の谷部分とが錯綜している。丘陵部は粘土・砂礫を主体としたいわゆる大阪層群からなり、極めて崩落しやすい地層である。そして、丘陵斜面と谷筋を利用して水田が点在する。

この地域の埋蔵文化財の分布調査は、昭和56年4月に京都府教育委員会によって実施されており、4基の古墳と10か所の遺物散布地が確認されている（「山城南部地区遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要（1981-1）』京都府教育委員会 1981）。古墳は墳丘の形状等から判断したもので、遺物は見つかっていない。



第1図 調査地位置図 (1/200,000)

調査概要 今回は、分布調査の結果に基づいて昭和57年度から試掘調査を実施し、遺構の有無、遺跡の範囲をは握し、遺跡の保存及び本調査の資料を作成することを目的とした。調査は、古墳と推定される地点には幅 1 m のトレンチを、遺物散布地には幅 3 m のトレンチを設定して行った。昭和58年度に実施した試掘調査で判明したのは、



第2図 調査地点位置図 (1/25,000)

以下のとおりである。

No. 5 地点 合計6か所のトレンチを設定した。丘陵斜面と谷筋を水田としている。耕作土の下は、粘土層、粘質土、砂・砂礫層となっている。顕著な遺構はなかったが、陶磁器・土師器片などが出土した。

No. 9 地点 昨年度検出した幅約2mの東方から西方に傾斜する溝 (SD 01) の延長部分と、布目瓦が出土した落ち込みの上段にトレンチを入れた。溝 (SD 01) は東方で南に屈曲し、しだいに浅くなり消滅していた。落ち込みの上段では顕著な遺構はなかった。また、周辺に布目瓦に関連した遺構 (窯跡) が想定されるため分布調査を実施したが少量の遺物が発見されただけである。

No. 10 地点 合計5か所のトレンチを設定した。丘陵斜面と乾谷川の谷筋を水田としている。耕作土の下は、砂質土、砂・砂礫層、粘質土となっている。Aトレンチで幅20cm前後の溝を上下2層にわたって検出した。Eトレンチでは、深い部分で約1mの盛土

をして水田を造っており、この盛土層から8世紀末期の須恵器と土師器甕及び中・近世の遺物が出土した。

No. 11 地点 合計5か所のトレンチを設定した。北向きの丘陵斜面を水田としている。耕作土の下は、粘土層、粘質土、砂・砂礫層となっている。水田を造るため1m以上盛土した部分がある。Bトレンチで暗渠排水路と杭列を検出した。近世以後のものと思われる。陶磁器・土師器・瓦器・「寛永通宝」などが出土した。

No. 13 地点 合計6か所のトレンチを設定した。丘陵斜面と谷筋を水田としている。耕作土の下は、粘質土、砂質土、砂礫層となっている。水田を造るため谷筋を埋めて1m以上盛土した部分がある。顕著な遺構はなく、陶磁器・瓦器・土師器・須恵器が出土した。

No. 14 地点 合計14か所のトレンチ・グリッドを設定した。丘陵斜面と谷筋を水田としている。耕作土の下は、粘土層、粘質土、砂・砂礫層となっている。谷筋を埋めて水田とした部分がよくわかるものがある。陶磁器・土師器・瓦・「寛永通宝」などが出土した。

まとめ 今回の試掘調査では、No. 9 地点で布目瓦が出土した落ち込みとこれに連なる溝、No. 10・No. 11 地点で近世の幅20cm前後の溝、暗渠排水路と杭列を検出したが、他に顕著な遺構は存在しなかった。

No. 9 地点の布目瓦が出土した場所は、丘陵斜面の乾谷川が方向を変える地点で、狭い段丘状になっている。出土した平瓦は、摩滅も少なくまとまって出土していることから、周辺地から運ばれてきたものと思われる。また、乾谷川の斜め対岸のNo. 10 地点では、8世紀末期の須恵器等も発見されているので、この周辺には、奈良～平安時代の窯跡の存在が予想される。今後、工事実施にあたっては十分な注意が必要である。

なお、調査地内の水田は、溝や盛土中から出土する遺物、あるいは排水路・杭列の検出状況からみて、中世に開発が始まり、近世には幾度かの改修が行われていることが判明した。これらの水田の上部に池が存在することも特徴のひとつである。

(石尾 政信)

資料紹介

南金岐遺跡出土の石庖丁

ここに紹介する資料は、昭和56年度に国道9号線バイパス建設工事に先立って行われた
みなみかなげ (注1)
 南金岐遺跡の調査において出土したものである。

南金岐遺跡は、亀岡市大井町南金岐に所在する。亀岡盆地を貫流する大堰川の左岸に位置する標高431mの行者山東麓裾部にあたり、標高102~103mを測る中位の丘陵端に立地する。桑田郡条里制跡を始めとして小金岐古墳群・馬場ヶ崎古墳など周辺地には多くの遺跡が知られているが、とりわけ太田遺跡・東谷遺跡・北金岐遺跡・湯井遺跡・千代川遺跡・千代川桑寺下層遺跡等、行者山東麓裾に連綿として続く弥生時代遺跡群との関係において当遺跡は重要である。調査では弥生時代中期前半に属すると考えられる方形周溝墓のほか大小いくつかの溝が検出されている。石庖丁は弥生時代後期に中心を置く溝から出土した。

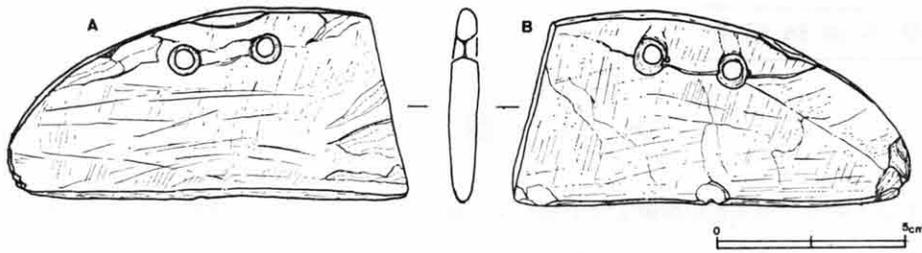
では、以下に石庖丁について観察し、気づいた点をいくつか記して報告としたい。

本資料は側縁の一端に欠損をみるが、ほぼ全形を知ることができる。背縁は外湾し刃部が直線をなす、いわゆる直線刃半月形態(注2)をとる。石材はやや風化の進行した頁岩ないし粘板岩を素材とし、色調は灰色を帯びる。現存長10.6cm・幅5.1cm・厚さ0.7cm、重量はほぼ60gを測る。主要面は葉理に沿って取る。A面には風化面と思われる気泡状の痕跡が観察されることから、B面側が主要剥離面であると判断される。背縁には整形段階の階段状剥離痕をとどめる。器表には、側縁からの整形剥離による欠損のほか第1次粗研磨痕が認められるが、全体に細かく丁寧な研磨による調整が行われており、平滑な器面をなしている。下縁は主にA面から研ぎ出し刃部を形成し、補助的にB面からも研ぎ出しが行わ



第1図 南金岐遺跡位置図 (1/50,000)

れる。刃部は使用→損耗→再研磨のサイクルを多く経たため、鋭さを失い丸い刃縁となっている。刃縁には擦過痕がわずかに認められる程度で、使用による明瞭な欠損はない。B面にみる小剥離は二次的な欠損痕である。刃縁はほぼ水平であるが、A面側右孔直下はやや内湾する傾向をみせる。これは使用に際してこの部分が対象との接触が多かったことを示唆するものである。貫孔は両面からドリル状の工具によって行う。



第2図 石庖丁実測図

B面では孔に接して穿孔途中の窪みが2つ観察されるが、貫孔にあたって敲打した痕跡が認められないことから、直接回転貫孔を行ったものようである。孔は体部の左寄り上にあつて、刃部を水平に置くと、右側が高く左側に低く穿孔されている。2孔は穂摘み具としての石庖丁を手中に固定する際の紐孔と考えられている。従つて、石庖丁の観察は成形・調整段階、刃部の使用痕とあわせて、紐孔が使用により紐との間に生じる摩擦によって損耗する状態を観察することもまた大切である。2孔の摩滅はA面では孔の相接する部分に、B面では孔の上縁から背縁に向う位置に認められる。また、A面の孔間には2孔を結ぶ刃にみえる痕跡がある。すなわち、「双孔に通した紐は下面側（A面側）では穴を連ねる方に、上面側（B面側）では背の方に引いて輪をつくる」という紐の着装痕が観察されるわけである。

畿内では弥生時代中期に石庖丁の急増をみる事が知られており、その主流となるものは、片刃の直線刃半月形態である。これまでに蓄積された数多くの資料の使用痕・紐擦れなどの観察、現存する民俗例などから、その使用の実体がほぼ復元されている。それは、「石庖丁を手に握るには双孔に通した紐の輪に右手の中指を入れて上面側に親指をおき、残りの四指は下面に軽く押しあてる。」というものであり、「右手ききの人が片刃の方を下面にして使用したことは明らか^(注3)」というものである。

本資料では刃縁に明瞭な使用痕の残存がなく刃部も明瞭とはいえないが、刃部の成形、紐擦れ痕等の状態を見るに、石庖丁の使用の実際を伝える良好な遺物とすることができよう。(田代 弘)

注1 村尾政人ほか「国道9号線バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注2 森本六爾「石庖丁の諸形態と分布」(『日本原始農業新論』東京考古学会) 1934

注3 木下正史編「弥生時代」(『日本の美術』第192号 至文堂) 1982

府下遺跡紹介

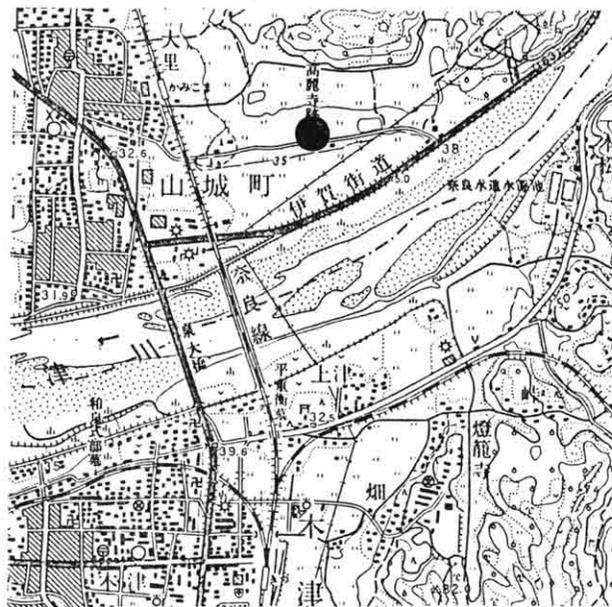
18. 高麗寺跡

高麗寺跡は、相楽郡山城町大字上狛小字高麗寺にあつて、すでに廃絶した寺院である。それにもかかわらず、ここが「高麗寺」とわかつたのは、小字名が「高麗寺」というだけでなく、わが国最古の仏教説話集『日本霊異記』中巻・第18話の中にその名がでてくるからである。そこには、「去にし天平年中、山背国相楽郡の部内に、一の白衣有り。姓名未だ詳ならず。同じ郡の高麗寺の僧榮常、常に法花経を誦持す。彼の白衣、僧と其の寺に居て、暫の間基を作す。」とある。この史料によると、高麗寺は、山背国相楽郡にあつたとあり、当寺跡の小字名からすると、当寺跡の名が「高麗寺」となることは確實である。

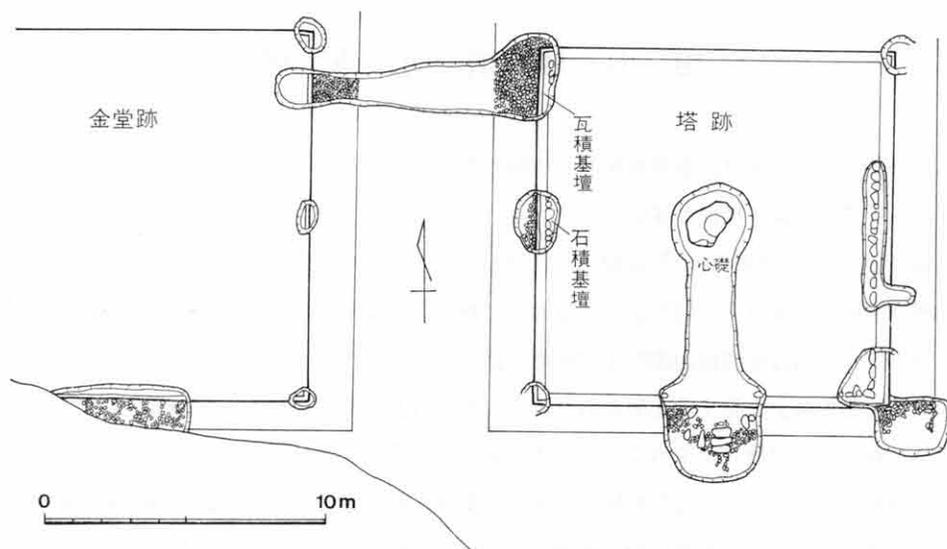
文献史料は、これ以外に信頼できるものはなく、その草創や沿革についてはほとんど知ることができない。わずかに、大字名が「上狛」といい、「狛」が「高麗」、すなわち、高句麗に通じることから、高句麗系渡来氏族である「上狛氏」と高麗寺とが何か関係があるのではないかと推測されるにとどまっている。

このように、高麗寺についてはほとんどわからなかつたが、昭和13年に中津川保一氏・田中重久氏・木村捷三郎氏らが発掘調査を実施されてから様々な事実がわかるようになった。この寺の伽藍配置が、東に塔、西に金堂を配する形式（法起寺式か？）で、いずれも瓦積基壇を持つことがわかつたのもこの時の調査である。また、塔の心礎も横に穴を持つ珍しいものとわかつた。

その後、梅原末治氏を中心とする京都府史蹟勝地調査会によって発掘調査が行われた。その結果、塔は南側に階段を持っていることから、南向きに建てられたことがわかつた。しかも、注目すべきことに、瓦積基壇の内側にも石積みの基壇が発見されたのである。このことは、当初、塔が



第1図 高麗寺跡位置図 (1/25,000)



第2図 遺構平面図（『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊 図版第24より作成）

石積基壇で建立されたが、その後基壇が瓦積基壇に改築されたことを意味する。一方、金堂は、塔の西側約6mの地点にあって、こちらの方は瓦積基壇だけで造られたことがわかった。

なお、発掘調査は行われなかったが、塔や金堂の北側にも基壇のような高まりがあって、柱座を作り出した礎石が残っていることから、ここが講堂跡と推定された。

出土遺物としては、瓦が重要である。大和の飛鳥寺出土の素弁蓮華文の軒丸瓦と同一型式のものが高麗寺で出土しており、この寺の創立は飛鳥時代にまでさかのぼらしい。ただ、現存の遺構とは直接結びつかないようである。瓦で最も多いものは、川原寺式の複弁蓮華文の軒丸瓦と重弧文の軒平瓦のセットであり、これ以降の奈良時代後期・平安時代初期までの瓦も出土している。奈良時代後期の瓦は、山城国分寺のものと共通するものが多く、なかには山城国分寺でよく出土する「中臣」と刻印された文字瓦もある。その他の遺物として、飾金具類・飾石材・釘類があり、当時の高麗寺のようすを伝えている。

高麗寺は、高句麗系渡来氏族と関係する寺院であるが、相楽郡は高句麗の使節を迎えた相楽館^{むろつみ}のあったところで、何かと高句麗との関係のいわれる地域である。『和名類聚抄』によると、相楽郡には高麗寺のあった「上狛郷」のほかに、「下狛郷」もあった。下狛郷と推定される精華町下狛には、高麗寺とよく似た文様の白鳳時代（7世紀後半）の瓦が出土する寺院跡もある。

（土橋 誠）

参考文献

- 『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊 京都府 1938
 田中重久「高麗寺創立の研究」（『考古学』9-6） 1938
 樋口隆康編『京都考古学散歩』 学生社 1976

19. 山城国分寺跡

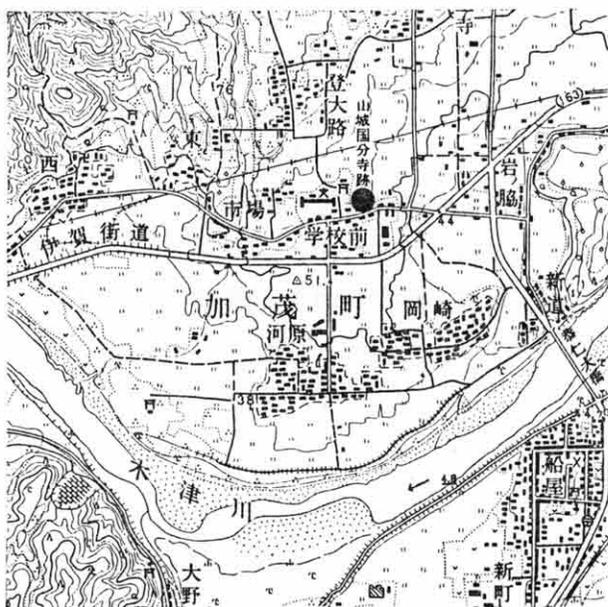
山城(背)国分寺跡は、相楽郡加茂町^{れいへい}例幣^{みことのり}にあって、金堂跡の土壇の上にはつい最近まで寺が建っていたが、現在は無い。

国分寺は、天平13(741)年の国分寺建立の詔^{みことのり}によって本格的に造営され始めるので、山背国分寺も他の国分寺と同じように造営されたことはいままでの間もない。ただ、その位置については、当初は相楽郡加茂町大字河原の地に建てられたとする説がある。実際、この地には「光明寺塚」と称する土壇があり、そこから古瓦が多数見つまっている。ここを当初造営され始めた国分寺とすることもできるが、詳しくはよくわかっていない。

山背国分寺(僧寺)が現在の地で本格的に造営が始まるのは、天平18(746)年以降であろう。奈良時代の記録を年代順に整理した『続日本紀』には、「(天平18年9月29日) 恭仁宮大極殿を国分寺に施入する。」とある。恭仁宮は、天平12(740)年12月に遷都の議がおこってから造られるが、天平14・15年頃には近江に紫香楽宮も造るようになる。天平16(744)年の難波遷都の後、翌17(745)年5月には再び平城宮に戻ることにになり、恭仁宮は、完成されることなく廃都になってしまった。このように、恭仁宮の大極殿を利用して山背国分寺が造られたこともあって、現在の地に遺跡を残しているのである。従って、当地は、国分寺跡であるだけでなく、恭仁宮の遺跡でもある。

現存の遺構としては、金堂跡と塔跡がみられる。金堂跡には、原位置を保っている礎石と、すでに動かされた礎石とがあるが、発掘調査の結果、柱間17尺で南北4間(約20m)、東西9間(約45m)の巨大な建物が建っていたことがわかった。この建物こそ、恭仁宮の大極殿を施入したものと考えられる。基壇は瓦積で、積み方がやや粗末であったらしい。

塔跡には、礎石が2個失わ



第1図 山城国分寺跡位置図 (1/25,000)

れている以外、15個の礎石が原位置のまま整然と残っている。礎石は、すべて花崗岩^{かこう}でできており、ていねいに加工してある。そのなかでも、心礎は特に大きく、径1.6mもある柱座があり、中央部には柄がつき出ている。その他の塔の礎石も中央に柄がつき出ている、柱座の径も約1mで揃っている。外側の柱の礎石には地覆座までつくり出されている。

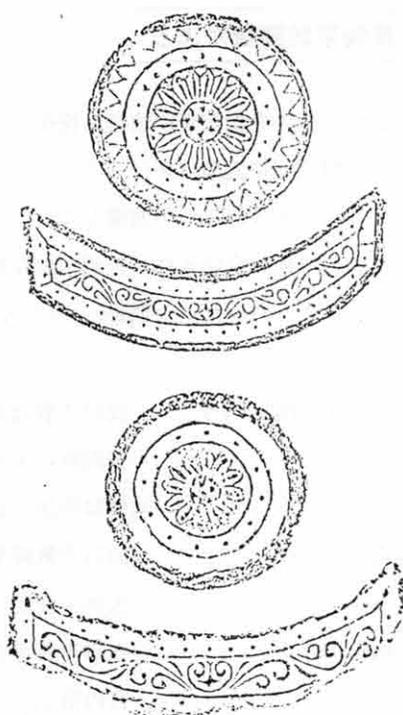
現在、地上で確認できる遺構は、この程度で、講堂については、あったかどうかわからない。あるとすれば、北側で、伽藍配置は典型的な国分寺式（東大寺式の略型で、塔が1つしかないもの）をとると推定される。

出土遺物としては、古瓦が圧倒的に多い。金堂跡を調査したときには、恭仁宮時代の瓦もいっしょに出土している。しかも、全体に奈良時代の瓦は、平城宮から出土するものと共通のものが多く、古瓦の中で注目すべきは、文字瓦である。これまでに確認されたのは、「中臣」「大伴」「刑部」「土師」「出雲」「日奉」「額田部」「六人」「太万呂」「乙万呂」「真依」「足得」「老」「古」といったもので、なかには逆字で刻印されたものもある。

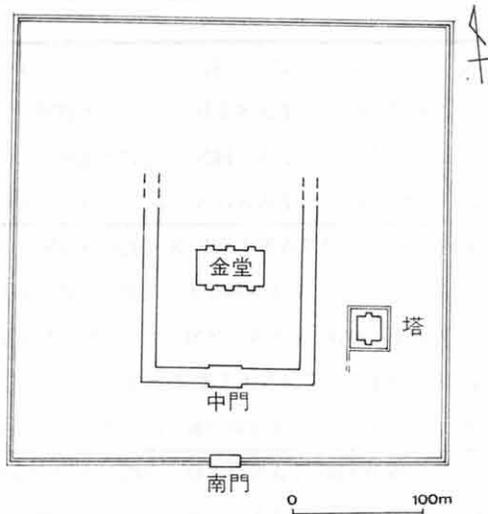
従来、当国分寺跡は、著名なわりには寺域なども不明であったが、昭和48年度からの発掘調査で、東・南・北限について、金堂を中心にそれぞれ550尺・500尺・600～650尺といった線が推定されるようになった。（土橋 誠）

参考文献

『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1974～1983



第2図 山背国分寺造営時の軒瓦
(縮尺 7/40)



第3図 山背国分寺復原プラン

長岡京跡調査だより

長岡京跡の発掘調査の情報交換を目的として、当調査研究センターの長岡整理事務所で毎月長岡京連絡協議会を行っているが、昭和59年1月・2月・3月は、それぞれ1月25日・2月22日・3月21日に開催した。この間報告された調査は、一覧表のとおり長岡宮跡3件、長岡京跡右京城5件、長岡京跡左京城4件の計12件である。

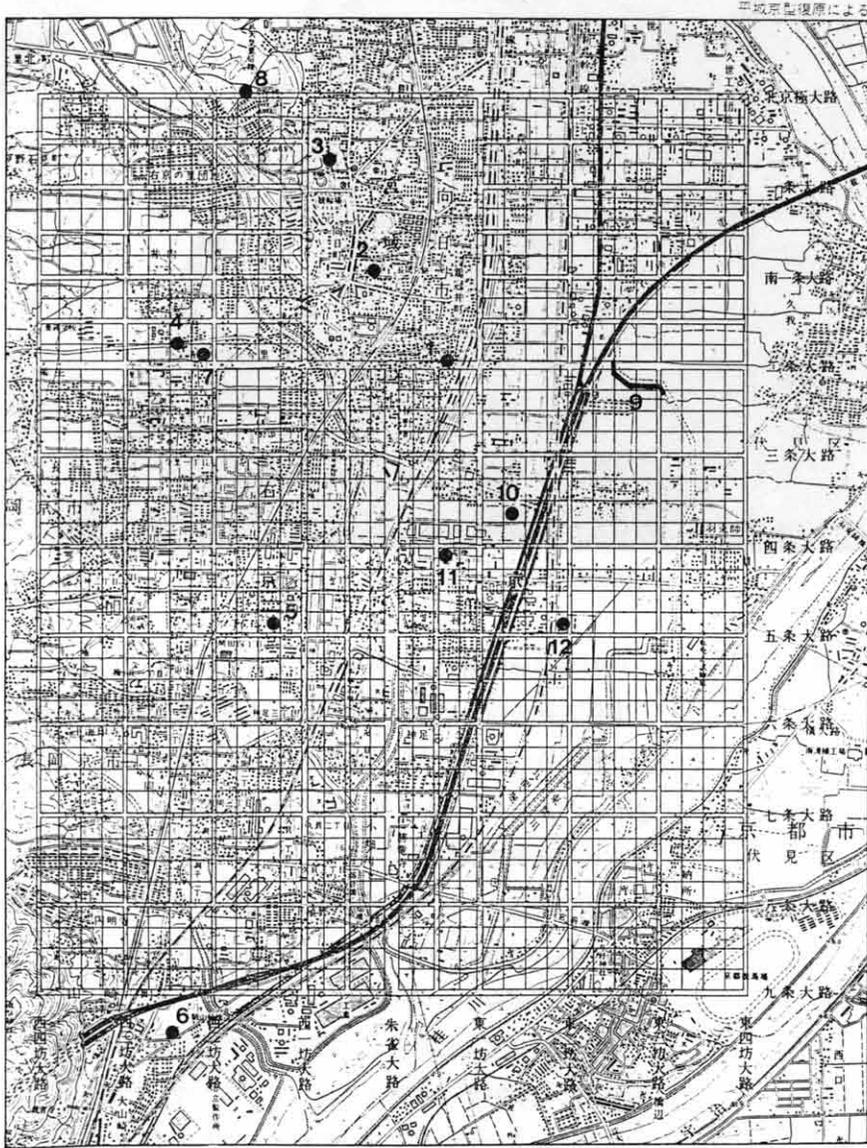
これらのうち主だった調査について、以下に略記する。

- | | |
|---------------|---|
| 宮内第 144 次 (1) | 向日市教育委員会 長岡宮の南限に当る地域であるが、後世の攪乱のため長岡宮の遺構は検出されなかった。 |
| 宮内第 145 次 (2) | 向日市教育委員会 後世の攪乱のため、長岡宮の遺構の検出は認められなかった。 |
| 宮内第 146 次 (3) | 向日市教育委員会 宮内第 119 次調査地の西接地で、向日丘陵の斜面上に当る。宮内第 119 次調査では、傾斜変換線に沿って北北西から南南東へ延びる長岡京期の溝を検出しているが、今回調査地では表土直下で地山となり、遺構・遺物は検出されなかった。 |

| | 調査回数 | 地区名 | 調査地 | 調査機関 | 調査期間 |
|----|-----------|--------------|------------------|----------|---------------------|
| 1 | 宮内第 144 次 | 7 AN 5 B | 向日市上植野町浄徳34-4 | 向日市教委 | 59. 2. 13～ 3. 13 |
| 2 | 宮内第 145 次 | 7 AN 14 N | 向日市鶏冠井町大極殿 | 〃 | 2. 8～ 2. 10 |
| 3 | 宮内第 146 次 | 7 AN 17 A | 向日市寺戸町南垣内 | 〃 | 3. 8～ 3. 9 |
| 4 | 右京第 153 次 | 7 AN I K E-3 | 長岡京市今里 4 丁目 | (財)京都府埋 | 58. 12. 9～59. 2. 2 |
| 5 | 右京第 155 次 | 7 AN K S T | 長岡京市開田 3 丁目228-1 | (財)長岡京市埋 | 59. 1. 23～ 2. 29 |
| 6 | 右京第 156 次 | 7 AN S N M | 大山崎町円明寺夏目21 | (財)京都府埋 | 2. 13～ 3. 2 |
| 7 | 右京第 157 次 | 7 AN I T T-8 | 長岡京市今里 4 丁目28-1 | (財)長岡京市埋 | 3. 15～ |
| 8 | 右京第 158 次 | 7 AN B O K | 向日市寺戸町大牧6-1 | 向日市教委 | 3. 19～ |
| 9 | 左京第 103 次 | 7 AN O T G | 京都市伏見区西出合町 | (財)京都市埋 | 58. 12. 1～59. 2. 14 |
| 10 | 左京第 106 次 | 7 AN F T B | 向日市上植野町十ヶ坪 | 向日市教委 | 58. 12. 1～ |
| 11 | 左京第 107 次 | 7 AN M T G-4 | 長岡京市神足棚次6-1 | (財)長岡京市埋 | 59. 1. 25～ 3. 7 |
| 12 | 左京第 108 次 | 7 AN L H K-2 | 長岡京市馬場人塚1-1 | 〃 | 2. 8～ 3. 12 |

長岡京跡調査地一覧表(59.3.26現在)

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応



右京第153次調査 遺構検出状況（東から）

右京第 153 次 (4)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京跡の西三坊坊間小路等に当たるが、長岡京跡に関連する遺構は検出されず、弥生時代後期の竪穴式住居跡(?)や古墳時代末から奈良時代にかけての掘立柱建物跡等を検出した。これらは、東方の右京第7次調査等で検出されている弥生時代後期から古墳時代末の集落跡や西方の右京第112次調査で検出された弥生時代後期の竪穴式住居跡等と関係するものかと思われる。

右京第 155 次 (5)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

五条大路推定地に近接し、近辺では五条大路の両側溝の他、長岡京期の建物跡等が多数検出されている。今回の調査地では、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列の他、井戸を検出した。井戸は、くり抜きの井筒が残存しており、軒丸瓦・軒平瓦・土師器・須恵器の他、「萬年通寶」・くし等が出土した。

右京第 156 次 (6)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京跡の南縁部で、平安時代前期の集落跡である百々^{どど}遺跡に当たるが、今回の調査地では、小泉川の氾濫による砂層や青灰色粘

- 右京第157次 (7) 土層が存在するのみで、遺構は検出されなかった。
 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
 西二坊大路の西接地で、今里遺跡にもあたる。近辺の調査では弥生時代から古墳時代末期の竪穴式住居跡が多数検出されている。現在、精査中である。
- 左京第106次 (10) 向日市教育委員会
 左京四条二坊五町に当る。四条第二小路の南北側溝や長岡京期の掘立柱建物跡を検出した。ただし北側溝は、長岡京期のものと考えられる真南北方向に軸線をあわず庇を有する南北棟の掘立柱建物跡や木簡が出土した井戸に削られており、問題を残す。長岡京期の掘立柱建物跡は、5棟検出された。1棟は、3間×5間の南北棟で西に庇を有する。他に2間×3間の東西棟を3棟、南北2間・東西5間の東西棟を1棟検出している。また、長岡京期の建物に切られて井戸が存在している。他に古墳時代の竪穴式住居跡を7基検出した。
- 左京第107次 (11) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
 左京第97次調査地の北接地で、東二坊大路の西側溝や、中世・平安時代の溝、弥生時代の溝等を検出した。
- 左京第108次 (12) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
 中世の溝2条の他、布留式土器が出土する溝や土壇を検出した。また長岡京期の柱穴や溝も検出している。

(山口 博)

センターの動向 (59.1~3)

1. できごと

- 1.19 千代川桑寺遺跡(亀岡市)現地説明会開催, 約30名参加
- 1.21~22 第15回埋蔵文化財研究会一於大阪市一出席(堤調査課長, 杉原課長補佐, 辻本主任調査員, 伊野, 小山, 岩松, 藤原, 石井, 村尾, 引原, 田代, 石尾, 竹原, 戸原, 小池各調査員)
- 1.24~25 奈良国立文化財研究所主催「条里制研究会」出席(村尾調査員)
- 1.25 長岡京跡右京第153次調査(長岡京市)関係者説明会実施
長岡京連絡協議会開催
- 2.22 長岡京連絡協議会開催
- 2.27 重要文化財三宝院宝篋印塔基壇(京都市伏見区)発掘調査関係者説明会実施
- 3.9 昭和59年度職員採用試験実施要項協議(福山理事長, 樋口副理事長, 原口理事, 栗栖常務理事, 白塚総務課長, 堤調査課長)
- 3.21 長岡京連絡協議会開催
- 3.24 隼上り遺跡(宇治市)現地説明会開催, 雨天のため参加者少数
- 3.27 昭和59年度職員採用試験実施
- 3.28 昭和59年度職員採用試験合格者発表

3.30 第9回役員会及び理事会開催

- 一於向日市民会館一
福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長,
藤井 学, 川上 貢, 足利健亮, 佐原
真理事, 栗栖幸雄常務理事出席

2. 普及啓発事業

- 1.21~22 第15回埋蔵文化財研究会一於大阪市一報告 石井清司調査員「丹後地方に於ける弥生式土器の様相」
- 1.28~29 第20回研修会一於綾部市中央公民館一開催主題『加古川・由良川の道』(発表者及び題名) 田代 弘「口丹波」, 中村孝行「北丹波」, 石井清司「丹後」, 瀬戸谷 皓「但馬」, 谷本 進「但馬」, 山本三郎「兵庫丹波」, 松下 勝「播磨」約200名参加
- 1.29 第2回講演会一於綾部市中央公民館一開催(講師及び演題) 佐原 真「加古川・由良川の道」約100名参加
- 2.25 第21回研修会一於向日市民会館一開催主題『昭和58年度長岡京跡の発掘調査』(発表者) 山中 章, 宮原晋一, 岩崎 誠, 長宗繁一, 長谷川 達
- 3.31 『京都府埋蔵文化財情報』第11号刊行

受贈図書一覧 (58.12~59.2)

- (財)北海道埋蔵文化財センター
美沢川流域の遺跡群VI, ママチ遺跡, 旭川I遺跡, 虎杖浜3遺跡, 千蔵5遺跡, 川上B遺跡
- (財)岩手県埋蔵文化財センター
岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第67~69集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
庚塚・上・雷遺跡
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第17~30集, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報3, 研究紀要1982
- (財)東京都埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター研究論集II
- 鎌倉考古学研究所
研修道場用地発掘調査報告書, 直会殿用地発掘調査報告書
- 石川県立埋蔵文化財センター
松任市上二口遺跡, 輪島市三井保遺跡, 七尾市古府タブノキダ遺跡, 石川県立埋蔵文化財センター年報 第3号
- (財)駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所
昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概報
- (財)滋賀県文化財保護協会
近江の原始・古代—最近の発掘調査から—
- (財)大阪文化財センター
亀井, 西岩田, 友井東(その2), 山賀(その2), 同(その4), 田山遺跡, 財団法人大阪文化財センター蔵図書目録
- (財)大阪市文化財協会
長原遺跡発掘調査報告, 瓜破遺跡
- 奈良国立文化財研究所
飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告
- 岩美町城跡調査委員会
鹿野城跡調査概報, 鳥取県岩美郡岩美町長谷御屋敷
- (財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター
長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
草戸千軒町遺跡—第30次発掘調査概要—, 草戸千軒—調査研究ニュース—第1~3巻, 同第10巻
- 山形県教育委員会
昭和57年度山形県埋蔵文化財調査報告書 第62~74集
- 金沢市教育委員会
金沢市西念・南新保遺跡
- 五箇荘町教育委員会
昭和57年度五箇荘町埋蔵文化財調査年報I
- 滋賀県教育委員会
滋賀県遺跡目録
- 柏原市教育委員会
玉手山9号墳, 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1980年度
- 八尾市教育委員会
八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度, 成法寺遺跡
- 八鹿町教育委員会
八鹿町の条里, 但馬・米里遺跡
- 奈良市教育委員会
奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和57年度, 平城京東市跡推定地の調査I, 市道九条線関係遺跡発掘調査概報(I)
- 高知県教育委員会
日下川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 古津賀遺跡, 公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—原遺跡—, 飼古屋岩陰遺跡調査報告書, 土佐国衙跡発掘調査報告書 第3集, 同第4集
- 竹田市教育委員会
史跡旧竹田荘(母屋他二棟)修理工事報告書
- 北見市立北見郷土博物館
北見郷土博物館紀要 第13集

| | |
|------------------|---|
| 市立市川考古博物館 | 昭和57年度市立市川考古博物館年報 |
| 国立歴史民俗博物館 | 歴博 創刊号, 同第2号 |
| 出光美術館 | 出光美術館 館報第44号 |
| 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館 | 愛知県清洲町土田遺跡 |
| 名古屋市博物館 | 守山の遺跡と遺物 |
| 名古屋市見晴台考古資料館 | 年報2 |
| 鳥取県立博物館 | 郷土と博物館 第29巻第1号 |
| 広島県立歴史民俗資料館 | 年報 昭和56年度, 同昭和57年度 |
| 北九州市立考古博物館 | 九州の装飾古墳 |
| 九州歴史資料館 | 九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢 上巻, 同下巻, 青銅の武器—日本金属文化の黎明— |
| 日本大学史学会 | 史叢 第32号 |
| 早稲田大学考古学会 | 古代 第75・76合併号 |
| 大手前女子大学 | 大手前女子大学論集 第17号 |
| 大手前女子学園考古資料室 | 大坂城三の丸跡Ⅱ |
| 貿易陶磁研究会 | 陶易陶磁研究 第3号 |
| 埋蔵文化財研究会 | 埋蔵文化財研究会第15回研究集会発表要旨, 同資料 |
| 朝鮮学会 | 朝鮮学報 第108輯 |
| 京都府立丹後郷土資料館 | 丹後郷土資料館報 第4号 |
| (財)長岡京市埋蔵文化財センター | 長岡遷都の前後 |
| 大山崎町 | 大山崎町史 本文編 |
| 宇治市教育委員会 | 隼上り瓦窯跡発掘調査概報 |
| 城陽市教育委員会 | 城陽市埋蔵文化財調査報告書 第11集 |
| 網野町教育委員会 | 網野町山中家住宅調査概報 |
| 京都大学考古学研究会 | Trench 35 |
| 京都大学考古学研究室 | 京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部~第3部 |
| 花園大学考古学研究室 | 丸山遺跡発掘調査報告書 |
| 京都教育大学考古学研究室 | 史想 第20号 |
| (財)古代學協會 | 古代文化 第299号, 同第301号, 平安京土御門烏丸内裏跡—左京一 條三坊九町— |
| 福知山史談会 | 史談ふくち山30周年記念論文集, 両丹地方史 第36号, 同第37号 |
| 便 利 堂 | 醍醐寺, 千本釈迦堂大報恩寺 |
| 松 下 勝 | 兵庫県の歴史 第18号 |
| 清 水 尚 | 新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要 |
| 山 田 邦 和 | 京都府下の須恵器窯 |
| 小 出 義 治 | 瀬田遺跡 |

—編集後記—

『京都府埋蔵文化財情報』も第11号を迎えました。

今回は、船型木製品・梯子型木製品など注目すべき木製品が出土した亀岡市北金岐遺跡の大溝についての報告と、峰山町の七尾南古墳群の調査概要を中心に編集しました。

さて、昭和56年に発足しました当調査研究センターも、4月で満4年を迎えます。それとともに向日市に移り、新しい庁舎で気分も新たにさらに充実した活動を行ってゆく所存です。なお一層の御指導・御協力をお願い致します。

(編集担当 田中 彰)

京都府埋蔵文化財情報 第11号

昭和59年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075)256-0416

印刷 中西印刷株式会社

代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)